

## 【人文学】

研究論文

## つながりをつくる

—平和の論理としてのテトラレンマ—

上 菌 恒 太 郎<sup>\*1</sup>

## Creating Connections

—Tetralemma as a Logic Leading to Peace—

KAMIZONO Kohtaro

## Summary

In Nagasaki, peace is represented by symbols such as the dove, Nagasaki and Hiroshima, and thought through a frame of victimhood nationalism built up by the United States and China after World War II. The consciousness of peace is not based on feelings in one's life. In order to rebuild peace from the perspective of the entire planet on which all living things coexist, it is necessary to leave dualism behind and rely on the logic of tetralemma, which exhausts all cases of human thought without falling into dilemmas.

When children think of themselves after an experience of a story of greening by planting poplars in a desert of China, we learn that children's consciousness is flexible. This process of jumping to underlying universality can be understood by the logic of tetralemma: 1) affirmation, 2) negation, 3) negation of affirmation and negation, and 4) affirmation of affirmation and negation. The third aspect of tetralemma is the core of this logic, evidenced by Nagarjuna and further elaborated on by Yamauchi Tokuryu (1974). Before the moral education lesson on life, the children thought about who they are by using character attributions and negations in relation to local nature. However, after the lesson of the travel story that is local to the Chinese desert, they lost their attribution and negation related to local nature and found that they themselves are essentially both life and greening together by planting poplars. After their activity as an actor, a term inspired by Bruno Latour, in the global task of greening, they could witness the restoration of living creatures on earth. The fundamental negation process of tetralemma creates underlying universality of life which then creates peace in connection with their everyday lives.

We can be an actor by using the logic of tetralemma and making fundamental relations with younger generations, who are flexible in their learning and can act for the future of our sustainability.

キーワード： テトラレンマ, 平和, 生命尊重, 教育臨床, アクター, 二元論

Keywords : Tetralemma, peace, respect for life, clinical education, actor, dualism

---

<sup>\*1</sup> 教職課程 教授

2023年4月17日受付

2023年6月8日受理

## 目次

1. はじめに
2. 二元論からの脱却
  - 2-1. 二元論から多元化でいいか
  - 2-2. 多元化から批判的歴史的反省へ
  - 2-3. テトラレンマの論理へ
3. 犠牲者意識ナショナリズムのなかの平和の危うさ
4. 生命尊重としてつながりを考える
5. おわりに

## 注

## 引用文献

## 1. はじめに

本論は2022年8月28日第61回社会教育研究全国集会（九州集会）No.7 平和分科会での基調提案を基にしている。平和構築のために、つながりを人類という立場に立ってつくる提案をおこなった。人間だけでなく、地球上のすべての存在がアクターとしてつながる道を開き、成長し、つながる論理をテトラレンマに求め、世代を超えて平和をつくる方向を見通そうとした。

基調提案のきっかけになった題は「核抑止論からの脱却」だった。しかし提案は、次の5つの理由でそのままは乗らないと述べた：核抑止論に乗って話を始めると、1. 抑止論をどう言い負かすかの議論に矮小化する、2. 抑止論と対抗論の二元論から抜けられない、3. 論の背景にある民族国家の一方（ウクライナに味方するか、日本にか）に分断される、4. 死刑制度があることは、国家が判断すれば人を殺していいとの体制を意味する、5. 若者や子どもの行為基盤をどう創るかの未来に発展しない。換言すると、反論する形では、核抑止論の前提となる枠組み、二元思考や民族国家の枠から脱却し難い。思考枠についての批判的反省がなければ、敵を攻撃するに墮する。むしろ、平和のためにどう行為するかを組み込んだ語りを試みたい。すると本論は、脱却した地点を探す話になる。

本論の叙述は話の筋をつなぐ形式をとり、体系的に述

べない。体系にしようとするすると叙述が演繹的になるが、本論は物語風に展開し、学問としては臨床の姿勢をとる。つまり、体験による理解に拠って考え、理論と実践との二元論は採らない。対象と認識主体を分ける二元的認識論と対比するならば、対象となる事象が認識主体から独立して一元的な論理のうちにあるわけではなく、認識と論理を再帰的に統合した地平を臨床と称する。論理展開には行為主体を含み、異なる事象に通底する論理を見出し、つながりの成長を含んで行為を支えようとする。行為の方向において認識は成り立ち、価値の方向に根拠をもつ教育は、子どもの体験を認識に止まらず行為へと構成する。本論は現実から出発するが、背景を反省的に探って現状を浮き彫りにし、論理を選んで、方向を定め、再び現実においてアクターとして行為するに至る、長い旅をしたい。

## 2. 二元論からの脱却

### 2-1. 二元論から多元化でいいか

地球上のすべての存在をアクターとみる思考、世代間をつなぐ思考、4つで考えるテトラレンマの思考のためには、近代思考にある二元論を脱却する必要がある。

ウクライナとロシア、朝鮮民主主義人民共和国（以下北朝鮮と称する）と日本、あるいは中華人民共和国（以下中国）と日本、といった二国間構図では、迎撃ミサイルと敵基地攻撃能力も一種の核抑止論になるかもしれない。そうした、相手国は核をもつから対策が必要、との論議には乗るまい。論に勝っても、相手は使うかもしれない、核攻撃された後で、敵基地を攻撃してどうするのか、またアメリカ合衆国（以下アメリカ）が核攻撃された際に日本が敵基地を攻撃すれば勝利したことになるのか。通常兵器でも原子力発電施設が攻撃されれば、核攻撃と同じ効果があるだろう、対抗してアメリカが原子爆弾で相手を攻撃してくれるように期待するのか、着弾前に空中で爆破された核弾頭はどのような威力をもつのか、などなど、相手がそうするとこちらはどうか言い争

いは尽きない。もっとも日本では議論を重ねる間もないまま、敵基地攻撃能力を持つことが決まったかのようで、予算も付いた。この決定の速さは、それだけ敵と味方という二元思考が広がっている証だろう。北朝鮮は敵だという合意が日本で成立しているのだろう。

ところが世界は二元的に動いていない。インドは、ウクライナ側にも立たずロシア側でもなく、グローバルサウスを代表するとの論理をたてる。東南アジア諸国は、シンガポールを除いて、ロシアへの経済制裁に加わっていない。新興国・途上国は、ウクライナ危機に巻き込まれながら、食料、エネルギー、過剰債務の危機に陥っており、財力や技術力でエネルギーを手当てするEU諸国や日本などG7とは異なる。するとインドの論理は無視できない。G7のGDP合計に、新興国・途上国のGDP合計が匹敵するようになった今日、むしろ、グローバルサウスの盟主という立場は世界をリードする自国の利益になる。

中国も、自国が途上国であるとの立場を捨てない。G7の側に立たず、ロシアとウクライナの和平を仲介する姿勢を示しながら、一帯一路によって多くの途上国をすでに巻き込んでいる。中国がロシアに寄り添いながら途上国を含む和平への姿勢を見せるとき、中国とロシアは互いに背後の安全を確かにして、勢力拡張を図る。ロシアのGDPが中国の9%<sup>2)</sup>であることを思えば、両国の接近は、中国によるロシアの抱き込みに見える<sup>3)</sup>。

サウジアラビアとイランの国交回復合意発表（2023年3月10日）は、中東諸国が、中国を仲立ちとしてG7とは独自の動きをすることを示す。それはロシアを含めて原油と天然ガスの利益を最大限にする、あるいは欧米の制約から脱出する意図があるだろう。中東の利益を図る構図は、ウクライナ対ロシアの二元論とは異なる。2003年にアメリカがイラクの大量破壊兵器開発という結局確認できなかった理由によって侵攻した中東において、ロシアの2022年3月のウクライナ侵攻に際してG7の側に立つように促しても、自国の利益になる以外の賛同は得られにくい。サウジアラビアはさらに、ロシアを仲立ちとして、シリアとも外交関係をつなぐ方向で動いている<sup>4)</sup>。

そして多くの評論家はこれらの動きを、多極化、多元化だと説明して終わる。多元論から出てくるのは、バランスや民主主義といった、二元論に止まる言葉か、ないし、多元をあるべき価値の方向だとする認識だ。多元や

民主の多様をどういう論理で通底するかの課題意識がない。多元や多様のまま放置して、互いに多元的に戦うわけにいかない。

二元論によって日本から海の向こうを見ると、抑止武装によって国民の命を守るストーリーに安心感を抱くのだろう。日本政府が、個人の生命の安全保証人という顔で登場し、中国の一部と北朝鮮を射程に入れた敵基地攻撃能力の必要を言いだす流れに、議論もほとんどないまま流される意識状況は危うい。中東でのアメリカのイラク侵攻を日本人はもう忘れたのだろう。15年戦争での日本の侵略を日本人はもう忘れたのだろうか。

国民の福祉を組織する平和的な政府という社会民主主義的な政府の役割イメージが縮小し、軍備によって国民の命を守る政府論を肯定するとき、それは戦争への道である。視野が既に閉じ込められている。守ってもらう閉じこもりへの支持が、自己イメージをひ弱な個人と言いたがる心情によって、広がる。

林志弦（イム ジヒョン）は引きこもる意識状況を鋭く指摘する：ネオ・ポピュリズムの登場によって、国家は経済を組織化して福祉を供給するという役割を後退させながら、個人の安全の保証人として強力に再登場してきた。テロリズムや国際的な不安定化に特徴づけられる私たちが生きている継続的な緊急事態は、愛国心や人身保護令状の停止など非民主的な権力による統治の容認を正当化し許容している（林志弦，2022a，p.24）。すると、治安維持法発動が間近なのかもしれない。

ロシアのウクライナ侵攻、中国や北朝鮮の宇宙開発やロケット発射実験や核開発が、緊急事態だとの言説によって、福祉国家が平和のあり方だとの認識は遠くに追いやられ、国民の命を守る武装という矛盾言説が前面に流れる。例えば、日本の沖縄県石垣島において、2023年3月に地対艦・地対空ミサイル部隊が初めて駐屯し、攻撃される理由のなかった島が戦場になる怖れが反対運動を引き起こし「反戦平和」と記した幟が立てられた<sup>5)</sup>。ミサイル部隊を迎えた石垣の幟では平和は反戦であるが、本土の平和は敵基地攻撃能力の保持である。敵基地攻撃能力は戦争準備ではないと説明され、本土を守るために沖縄で軍備が強化される。そのミサイル部隊の軍備は沖縄の人々の命を守るのだろうか。沖縄を捨てて「天皇制民

主義」(ジョン・ダワー, 2001 下, 第 4 部第 9, 10, 11 章)に走った東京が、沖縄の命を今なら守るのだろうか。第二次世界大戦の構図と同じだ、本土の日本人は忘れたのだろうか。「裕仁はしたたかで適応力のある人物であり、天の助け——もっと具体的にいえばマッカーサーの助け——によって生き残り、満ち足りた人生を送った」(ジョン・ダワー, 2001 下, p.3)と同様に、沖縄の人々も敵基地攻撃能力の言説に適応すれば満ち足りた人生を送れるのだろうか。

## 2-2. 多元化から批判的歴史的反省へ

ここまでの記述は、二国間の対立、せいぜい第三国を介した二国間関係を並べた。世界の状況認識には二元論では無理だという語りである。二元論は広がって、世界を多元的に見る話に終わる。それはせいぜい、複雑さを捉えて世界を俯瞰して終わる評論であろう。まとめる言葉が、多極化、多様性との用語である。何元論ならいいのか語らないし、極をいくつ設ければ考えとして足りるか言わず、多極化、多様性は、そこで納得すべきだ、との含意をもつ表現に聞こえる。授業の最後に先生がわかりましたか、と言うのと同じだ。わかりませんとは言にくい。それ以上問うとなると、何元論で考え行為するかを追求する話になる。何元論でどう考え行為するか、自己の脚下を省みる反省思考を始めなければなるまい。民族国家の内に籠もる思考は、歴史的に構成されてきた。その思考を批判的に検討する必要がある(以下に述べる)。その上で、何元論によってどう考えるのが妥当か述べる(2-3に書く)。

日本から見て海の向こうの敵と目される人たちとは、78年前までの、そしてその後の熱いつながりがある。熱いとは日本が侵略した戦争であり、その後の熱烈なアメリカ歓迎であり、中国人歓迎、韓国人歓迎である。日本がアメリカの支配と文化、核の傘を受け入れ、原爆を投下したアメリカ憎しと言わず、長崎は中国人観光客を歓迎しているし、長崎の対馬は韓国人観光客を熱烈に歓迎する。第二次世界大戦における核被害を含む日本の被害に話を限定するナショナリズムでは、攻めたはずの相手に、主にアジアに対する過去を取りあげないままの心地よさがある。海外からの人が観光客以外に少ない国内に限れ

ば、海外からの批判の寒風は気にしないでいいだろう。被害のナショナリズムには、ロシアの残虐さに対するウクライナへの同情を、日本の過去についてのでらいもなく、表明できる心地よさがある。ロシアの侵攻は日本の過去の姿ではないか、という人は聞かない。被害に籠もるナショナリスティックな語りの根拠を、歴史的に遡り、批判的に検討する必要がある。この検討は、加害についての戦争責任とはまた異なる。

日本人意識は明治以来政府によって醸成され、被害に籠もるナショナリズムの心地よさは、第二次世界大戦後の日本に対する策動によって形成された。策動したのは、連合軍占領政策であり、中国の和平の方針である。

### 占領軍政策による被害者意識ナショナリズムの容認

第二次世界大戦後、連合軍は占領政策として、天皇と軍閥とを区別する「くさび戦術 the wedge tactic」を採用し、天皇を通して秩序ある日本統治を図った。ジョン・ダワーは、マッカーサーがマニラで既に「天皇を通せば、完全に秩序ある統治を維持できるだろう」(ジョン・ダワー, 2001, p.18)と語っていたという。この流れは、東久邇宮稔彦首相が1945年9月4日の帝国議会で「『国民を苦境から救い出すために恒久平和を樹立する』道を開いたのは天皇であったと最大限に賞賛」した演説(ジョン・ダワー, 2001, p.19)に現れるし、また、「GHQの検閲官は、東城の役割は誇張されている、『戦争責任の問題』の真の核心は中国に対する侵略にある、といった批判を抑え込んでいた」(ジョン・ダワー, 2001, p.351)、さらに、「マッカーサー元帥は天皇裕仁を異常なまでに丁重に扱い、そのため…日米合作の官僚主義崇拝、戦争から平和への移行期を生き延びた大政翼賛会的な古い体質、天皇が象徴する、神秘性を覆(おお)原本ルビ)いにした説明責任の回避、新たに導入された天皇制民主主義のうちの成長不全の部分が残存することになった」(ジョン・ダワー, 2001, p.423)と解説する。

そうして帰米後の1951年5月5日マッカーサーは、上院合同委員会で「日本人は、時間的には古くからいる人々なのですが…近代文明の尺度で測れば、われわれが45歳で、成熟した年齢であるのに比べると、12歳の少年といったところ like a boy of twelve でしょう」(ジョン・ダワー, 2001, p.406)と回顧する。日本占領は、マッカ

一サー帰国後 1 年して正式に終了するが、「独立国というのは名目だけであり、ほかのすべてにおいて、日本は合衆国の保護国 a client state であった」（ジョン・ダワー、2001, p.408）と言う。

林志弦が続ける：連合国最高指令長官は、日本の人民は権力に従順な封建的慣行の奴隷であるという仮説のもとに占領統治をしていた。・・・民衆は受動的な主体となり、権力に盲目であり、権力のさまざまな侵略行為には無実な存在となる」（林志弦、2022a, p.23）。占領軍政策の枠内に止まる日本意識がどう評価されているかをふり返っておくべきだろう。

### 中華人民共和国による被疑者意識ナショナリズムの容認

日本の国民は侵略行為についてむしろ被害者だとの認証が、中国から寄せられる。『人民中国』インターネット版は、周恩来総理の功績として次のように中国の人々の意識状況と中国政府の政策を語る：中日共同声明は日本国の中国公民に対する戦争責任について「責任を痛感し、深く反省する」との文言になった。しかしそれには中国の人民大衆への説得活動に十分意を注ぐ必要があった。「新中国が成立してから、人々は広範な日本の国民と極めて少数の軍国主義分子を区別しなければならないと一貫して教育されてきたが、日本と国交を再び樹立するとすると、広範な人民への思想工作をしなければならなかった。そしてそれは、容易なことではなかった」が、それを成し遂げた周恩来総理は、1972 年 9 月の田中首相を歓迎する宴会でこう述べた。「1894 年以来の半世紀の中で、日本軍国主義の中国侵略によって中国人民は重大な災難をこうむり、日本人民もまた深い被害をうけました」<sup>6)</sup>。日本の人民は少数の軍国主義分子と区別されて、「日本人民もまた深い被害をうけた」として、中国はその戦争責任を問わない姿勢が示された。

この周恩来総理の戦争責任区別論は毛沢東の「連合政府論」にあると、王広濤は当該箇所を指摘する：（日本が一引用者注）無条件降伏したのちには、日本のファシズム、軍国主義、及びその生まれる政治的、経済的、社会的原因を徹底的に消滅するために、日本人民のすべての民主主義勢力が日本人民の民主主義制度を樹立するのを援助すべきだと考える」<sup>7)</sup>（王広濤、2015, p.273）。

沖縄の人々は、1972 年 5 月の施政権返還によって、中

国の言う日本人民のなかに入った。田中角栄内閣は 1972 年 7 月に発足している。もちろん沖縄は、GHQ のくさび戦術の対象ではなかった。

### 被害者意識ナショナリズムからの脱却の必要

こうして日本人は、連合国司令官からそして中国から、戦争責任を問われることなく、むしろ被害者であると認められて、後顧の憂いなく被害者ナショナリズムに籠もる政治状況が生まれる。悲惨だから核爆弾を使ってはならないと被害のみを語れる安心は、アメリカと中国のつくった枠の中で成り立っている。

悲惨だけを強調する被害の話は、核の投下責任と侵略戦争の責任をそぎ落として、核抑止論の一方となる二元論に陥る。被害の声が大きいほど、核の威力が認識される。悲惨さの語りは、海を越えると相対化される。ヒロシマ・ナガサキの惨事は、オシフィエンチム、南京など、それに環境問題、ミナマタ、福島原発など、人類が地球規模で解決すべき課題のひとつになる。これら地球規模の課題全体を見ての主張が、戦後史の意識状況として歴史的につくり出された枠を出て、若い世代の課題となる。

原爆による被害は甚大であり、その悲惨さはおおいに語られるべきである。その上で、被害の語りが、海外に受け入れられ、戦争を止める力となり、世代を超えて広がるには、脚下をふり返る必要がある。被害者意識ナショナリズムの枠内から見ると、中国同様の「思想工作」がおこなわれていない韓国の反応が、いぶかしく思えるのだろう。相対化されるまいと原子爆弾の惨事を他と比較して優位だと語るとき、「原子爆弾の犠牲者であるという一心不乱の主張は、日本の戦争犯罪や植民地での残虐行為を相殺するように思われた。アウシュヴィッツと広島は、人為的な恐ろしい大量殺戮の双子の象徴として、しばしば日本の被害者意識を喚起するために呼び起こされることになった。広島と長崎を記憶することは、南京虐殺や従軍慰安婦、捕虜の虐待などの数知れない残虐行為を忘却するひとつの方法であった」（林志弦、2022a, p.23）と指摘される。

林志弦は戦後日本の記憶文化について「時として広島の痛みがアウシュヴィッツより大きなものだという所にまで飛躍する」、つまり「アウシュヴィッツは終わった

が、生存者たちが被爆の後遺症で今も苦しめられている広島には終わりが無い」（林志弦, 2022b, p.124）との栗原貞子の言い方は、どの犠牲者が他よりも痛みを強いられたかの「犠牲者意識の競争を引き起こす」（林志弦, 2022b, p.124）と批判する。昭和天皇の戦争責任に言及し、ベトナムに平和を市民連合を通じて日本がベトナム戦争の加害者ではないかと自覚していった栗原貞子においても、被爆とアウシュヴィッツの2つを比較したとき、加害と被害の二元思考によって被害の枠のなかで比較する内へと籠もった思考があった。

長崎においても、「長崎の文化的記憶においてアウシュヴィッツの聖人である神父コルベと長崎の聖者である永井隆の併置は、『唯一の被爆国』という日本の犠牲者意識を裏付け」るが、それは「ポーランドの記憶文化に根を張る反ユダヤ主義の問題を完全に消し去ることによってトランスナショナルな記憶を国民化するプロセスを見せてくれ」（林志弦, 2022b, p.124）、ポーランドの状況を消した日本国内での二元併置として、国民の枠に思考を閉じ籠もらせる。しかるに「犠牲者意識ナショナリズムの前提である加害者と被害者という二分法的世界観は、植民地主義とジェノサイド、ホロコーストなどを根源的に批判できない」「だからこそ『世襲的犠牲者』という意識から抜け出し、自らも加害者になりうるという歴史的省察が必要なのだ」（林志弦, 2022b, p.235）。そして「犠牲者意識は、戦後日本の左派平和運動でも中心的な位置を占めて」（林志弦, 2022b, p.253）おり、「自己弁護的な日本の記憶文化」は「地球規模の記憶の連帯を阻む」（林志弦, 2022b, p.359）と言う。二元論の枠内でうごめく日本のナショナリスティックな被害者意識は、「地球規模の記憶構成体（global memory formation）」のなかで、「超国家的な観点から再検討しなければならない」（林志弦, 2022b, p.369&360）。地球全体とのつながりを志向する戦争被害の語りが求められる。

被害者意識ナショナリズムへの引き籠もりは、マッカーサーの感覚では12歳から抜けていないのだろう。この意識を、例えば日本人特有の甘え、として解説する方途もある。その解説はしかし、引きこもりの自己弁護である。マッカーサーから78年ほどを過ぎて今必要なのは、12歳から出ない意識状況の適当な用語による解説ではな

い。必要なのは、2023年で84歳に成長し、地球規模で俯瞰する立ち位置から平和を語ることだろう。長崎・広島を世界にそして次世代に伝え、また世界と次世代の課題の語りを長崎・広島に伝える入れ子構造の平和論が必要だろう。

歴史的過去において、戦後日本のナショナリズム、被害を強調する内向きの意識が形成されたのであれば、未来に向かうために視野を地球規模にして考え、世代を超える道を探す必要がある。地球規模で行為するために、如何なる論理で考えるかを論じる必要がある。そのとき84歳の、二元論から脱却した知恵が生きる。

### 2-3. テトラレンマの論理へ

二元論による思考は、ディレンマの苦悩を抜けない。ディレンマの焦りを、敵基地攻撃能力で絡め取られては危ない。近代<sup>8)</sup>西欧風に二元論によって、男と女に二分する愚は、男女が社会的な性であり、また遺伝子においても明確に2つに分かれないことから、明らかだろう。心と体を二分するデカルト以来の近代思考を基盤に、心理学と近代医学は広がりを獲得した。自然と人間の区別は、自然科学を了解する思考枠になっている。明瞭に見える対象としての自然もしかし、関わりとなると、互いに包摂する相即相入を考えざるを得ない。自然と人間は、自然が人間を包摂し、人間活動が人新世（Anthropocene）において自然を成立させていることは、環境問題の切迫によって証明される。ローカルとグローバルは2つではなく、つながり合い入れ子になる構造にあって、相即挿入する。

つながり合い入れ子構造になる話には、二元論成立の根拠である排中律を適用しては、分断をつくる。排中律は、2つに分ける論理上の根拠を必要とする。一般には2つでの思考が容易だから使い、あるいは権力への統合のために敵を作る必要があり、国境線を引く必要があるから、二元論が使われる。日本産の魚がフィリピン近海や中国や韓国やロシア近海に行かない保証はないが、誰が捕ったかどこに水揚げされたかで、どの国の産物かが決まる。地球規模からすると、スーパーマーケット表示のナショナリズムのために使われる。思考の歴史からすると、排中律が成り立つとして論理を組み立てる方向に傾いたのが、西欧近代であった。西欧近代が押し広げた世界、政治上

では、宗主国と植民地、植民地支配による線引き、国民国家による線引きによる地球が、人類としてこれからの姿か否かを考えていい。国民国家を認識の枠組みとせず、地球規模に通底する論理へと飛躍する必要がある。

近代の二元論を越えるために扱うべきは、人間と自然、グローバルとローカルの2つであろう<sup>9)</sup>。人間と自然との分離は、一方で社会を構成する自由意志のある人間イメージを生み、自律的な西欧風個人イメージの基盤となり、他方で自然が法則による必然性をもって動くイメージを生み、自然科学の必然性を正当化する基盤となった。ところが、自由意志によって観察する個人と、観察者と切り離された対象の必然の挙動という前提がかみ合わない事象は、自然科学においても社会科学においても知られる。さらに、自然科学のようなグローバルが、人間が心地よく過ごせる、顔が見えて息吹を感じられるローカルよりも、価値として優位であるイメージ、従って西欧規準が、例えば地域の作業着であるモンペはパリファッションよりも価値が薄く、おしゃれなファッション・ショップには並べられず、例えばノビルはエシャロット<sup>10)</sup>よりも取りあげる価値が薄く、高級野菜ショップにはないなど、ローカルはグローバルと切り離された上で、グローバルに通用する西欧規準のローカルが認知される。人間と自然、グローバルとローカルの二元論は、日常の意識を規定している。

近代西欧を総括して優れた考察を展開しているが二元論に止まるスティーヴン・トゥールミンを取り上げる。トゥールミンは後記で「非常に長い間、物理学の特徴であった決定論は、その最初から、ニュートン哲学についての誤解の結果であった」（トゥールミン、2009、p.329）と、合理主義が冒す「普遍的に妥当する原理に根拠を置かねばならないという想定」（トゥールミン、2009、p.212）による近代の科学と哲学を総括し、近代いらい最良とされた哲学と自然科学だけでは「ほんのわずかしか前進できないのだ。言い換えれば、現実の世界はわれわれの理想によっても形作られる」（トゥールミン、2009、p.330）と言う。近代哲学と自然科学について傾聴に値する見解であるがしかし、二元論から出ないために、「バランス」（第2章のタイトルが「理性はどのようにして

バランスを失ったのか。第10章のタイトルが「バランスを取り戻す」）を提案するしかない。

バランス論には、それによってバランスを裁定するメタ次元の論理を必要とする。二元論ではメタ理論の無限遡及に陥る危険があるが、トゥールミンはこの危険を避けて「どの点で理にかなっているかが明らかになるのは、…問題の実質を、詳しく調べる場合だけである」（トゥールミン、2009、p.213）と、事柄について臨床的に詳しく調べる、本論の構え、さらにラトゥール、につながる発言をする。トゥールミンもラトゥールも事柄に即して詳しく、つながりを経験的に記述する方向をとる。

ラトゥールは自らのアクターネットワーク理論（ANT）が「社会的なものを組み直す（強調はラトゥール）ことを望んで調査を行う者に資する」（ラトゥール、2019、p.21）と、行為を理論に組み込む。それは、アクターネットワークの場を見えるようにし、つながりを経験的に浮かび上がらせるアクターであるためである。ラトゥールは、社会と自然といった二元論について「『社会』と『自然』は、2つの実在領域を表しているのではなく、17世紀に当時の論争を大きな背景として同時に発明された二つの収集装置（強調はラトゥール）である」（ラトゥール、2019、pp.207-208）と言う。こうした近代に形成された概念枠から抜け出すための「第一の手立ては、グローバルなもの、コンテクスト的なもの、構造的なものを小さな場の内部に移すこと…第二の手立ては、一つひとつの場を、時間的、空間的に分散している他の諸々の場の暫時的な終着点に変換すること…そうすることで、それぞれの場は、距離の離れた他のエージェンシーによる行為の結果として生まれるものになる。…この二つの矯正が根気強くなされてはじめて第三の事象が現われ…今こそ、アリ（ANT—引用者注）が賞を勝ち取る時だ。二つの手立て——グローバルなものをローカル化することと、ローカルなものを分散させること——を同時に（強調はラトゥール）実行すると…場は、いまや、はっきりとアクターネットワークに変容し、背景に動かされる。前面に出るのは、結びつきであり…分かちがたい結合である」（ラトゥール、2019、pp.420-421）とまとめる。

グローバルなものをローカル化すること、ならびにローカルなものを分散させることは、論理構造として、一つの事柄に即し、ローカルがつながり、グローバルと入

れ子構造をなす一即多ならびに多即一である。二つの手立てを同時に実行すると、入れ子構造である相即相入の場になる。グローバルとローカルの概念によってねじるか、漢文によって短くねじるか、論理構造としては同じである。2つの概念（取っ手）によって、1つの事象をねじりながら説明する。「一事のなかに完全に理性（りししょう—引用者注）を摂し尽くせば、理性が融通している他の事もすべて一事の中に現じ、円融無礙が可能になるのである。一事の中に他事が現じないのであるから一即多、多即一となり、相即相入が可能となる」（鎌田茂雄，2003，pp.248-249）。もう少し説明する、鎌田茂雄は『華嚴の思想』においてこれを次のように言う：微塵のなかに大きな世界が全部入り込んでしまうのだという考え方で、…簡単にいうと「一即多（いちそくた）・多即一（たそくいち）」…一点のなかに全世界が映し出されるということ」<sup>11)</sup>（鎌田茂雄，2002，p.86）。さらに比喻によって解説する：因陀羅網（いんだらもう）で説明すると、網のA点を持ち上げると無限にあらゆる点がからみ合っていく、B点を持ち上げると無限にからんでいく、C点を持ち上げると無限にこれが関係してくる。C点を持ち上げているときには、Cを中心にあらゆるものがここに関係をしてくる。…因陀羅網とはインドラ（Indra）の網…のことで、その結び目にある珠玉が互いに相映じ、映じた珠がまた映じ合う（鎌田茂雄，2002，p.87）。こうして、前面に出るのは、つながりである。

事象を構成するすべての要素をアクターとして俎上に載せたい。人間だけをアクターとしない思考は、マルチピース民族誌にある。箭内匡は、多種（マルチピース）民族誌から「地球の論理」へ、と題した論文で「フンガ・トンガ＝フンガ・ハアパイ海底火山の大噴火は、私にとって、巨大火山という別の重要なアクターの存在を改めて印象づけるものであった」と、火山をアクターとし、「2010年にアメリカで旗揚げされたマルチピース民族誌が急速に世界の人類学に広がってきたのは、おそらく一火山の問題はともあれ—近年のこうした自然をめぐる諸問題の噴出とも無関係ではないだろう」（箭内匡，2022，p.82）と述べる。さらに最近の研究から「森林の地下で、樹木同士が菌根菌と呼ばれる菌類（キノコ）の糸で結ばれており、それらの間で栄養が運

ばれている」「マツ科の苗木はカバノキ科の苗木から、光合成による全体摂取量の6%にも相当する炭素を受け取っていた」「森林の木々は栄養分のみならず、例えば昆虫に食べられた時の危険信号なども、しばしば種の境界を越えて伝達している」（箭内匡，2022，pp.89-90）と紹介し、「植物が活動的な主体である」と、「植物を人のように考える」（箭内匡，2022，p.91）ことが新たな思考の可能性を拓く、と語る。その方向には「鉱物進化」まで提起されており、「道徳の問題を『人間を構成している幻影』の周辺で考えるのではなく、『地球の論理（ジェオロジー）』の中で考えるべきだ」（箭内匡，2022，p.99）と言う。植物も菌類も火山も人間同様のアクターと見なして、地球規模のつながりの論理が見えてくる。

本論では、結びつき、つながり、を区別せずに使う。結びつきは人間のつながりであるとともに、「『アクター』とは、行為の源ではなく、無数の事物が群がってくる動的な標的である」（ラトゥール，2019，p.88）とラトゥールは言い、人間だけに帰せられがちな行為主体の考えを分散させる。すると、アクターは全体としてのつながりを構成する。分散されたローカルにグローバルなネットワークを見出す場合は、つながりの様相を見えるようにする。アクターは人に限らず、アクターがネットワークを為す。先取りすれば、ポプラも砂漠緑化のアクターとしてネットワークにつながり、互いに入り込んで相即相入の関係にある。

アクターとネットワークの関係について、存在論風にはアクターがネットワークであると表現しているが、行為論風には「為す」と言っている。伊藤嘉高は「アクターネットワークは、アクターをつなぐネットワークではなく、アクターがネットワークなのである」（ラトゥール，2019，p.524）と訳者あとがきに述べる。ネットワークと表現すると、アクター相互をつなぐネットワークのイメージを生じさせやすいが、アクターが相即相入としてつながっている、と解説している。つながりが場を形成して課題に応じる様相は、アクターの相即相入によるネットワークと表現できる。場もまた、切り離されたローカルではなく、複数のローカルのつながりを為す。ローカルがつながり地球規模の思考が生まれるとき、それはグローバルだろう。相即相入のつながりの場はロ



一カルであってグローバルである。グローバルもローカルのつながりにおいて、あるいは、つながりにある地理的に離れたローカルな場において生まれる。

この思考は、華嚴経の体系的で徹底した叙述からすれば、空間イメージにおいて語られている。行為のつながりは、時間軸においても見られる。もっとも空間と時間と時間と二元的であるが、時間の思考に補完されるべき点を見てとることができる。人間と自然の近代における関わり形成には時間を必要としたし、グローバルがローカルを覆い飲み込むには、空間とともに時間を必要とした。すると、抑止論を越えた地点のためには、時間、単に時間がかかるだけではなく、思考の論理に次世代へとつなぐ行為を組み込む必要がある。世代を超えるためには、地球規模のアクターを形成する論理による教育を語る必要がある。

紀元3世紀以来おもにアジアに流通し、大乘仏教に保持されてきたテトラレンマを、世代を超えてつながるアクター形成を支える論理として援用する。テトラレンマは、ディレンマに陥らず、人間の考え得るあらゆる場合を尽くしており、また地球規模でアクターのネットワークをつくる教育の論理として生きる。

テトラレンマについて竹村牧男は、ラーガールジュナ（龍樹）の影響を華嚴経に見ながら、(一)有でもない、(二)無でもない、(三)亦有亦無でもない、(四)非有非無でもない（竹村牧男、2020、p.127）と、華嚴五教章を受けて整理する。しかし、空、縁起を含めた仏教理解のための否定表現による議論に引きずられた竹村牧男よりも、山内得立が浮かび上がらせた論理形式がすっきりしている。本論では、仏教理解に練り込まれた形式をとられない論理として、山内得立が西欧の論理とすりあわせて浮かび上がらせた論理によって語る。

山内得立はテトラレンマの論理を「排中律の逆転によってまさに起るべき一つの新しい立場である…しかるに我々はこのような哲学的立場を西欧のいづこにも、何の時代に於いても見出すことができない。却って東洋の、殊にインドの大乘仏教に於いて、就中ナーガールジュナの教学に於いて見出し得る…そのように考えることによって人間の思想の原則たる論理学の大系が完成せられる」（山内得立、1974、p.15）と、称揚することによる

がらも確信をもって「それは極めて困難な恐らくは不可能な仕事であるかもしれないが、尚もこの予想をすてきれないのは、一方に現今の歴史的現実によることであるとともに、原理的にも人間の思想の体系、即ち論理の組織を追求して止み得ない我々の志念に起因している」（山内得立、1974、p.15）と志のほどを語る。さらに「それ（否定の概念—引用者注）は判断の世界、就中価値判断の領域に於いて開示せられる概念である…価値はそもそも二肢的であり、肯定に対する否定が確立することなしには成立せぬものであった。…このことは…東洋の無とは根本的に異なった西洋の論理の基礎と、その特色をなしている」（山内得立、1974、p.31）と、東洋と西洋、もっと言えば東洋における無と西洋の存在との対比として考える。山内得立が西洋として挙げるのは、I.カント、G.W.F.ヘーゲルなど主に近代の哲学者である。

山内得立は「…仏陀時代の思惟を四論に纏（まと—引用者注）め、…四論とは(一)肯定、(二)否定、(三)肯定でもなく否定でもないもの、(四)肯定でもあり否定でもあるものという四つの論であり、それが所謂テトラ・レンマ(tetra-lemma)とよばれるものであるが、特に注意せらるべきは第三と第四の論である。西洋の論理は…判断は肯定か否定かの孰れか一つであってその外にはない。…然るにインドではこの外に第三及び第四の立場があり、これらを共に「中」に入れるならばインドの論理は中を排するものではなく、却ってそれを容認するところの論理である。即ち排中律を逆転して容中律を認める」（山内得立、1974、p.70）、「四論の区別は第一に人間の考え得る、又は考うべき四つの場合を尽している」、「重ねて言う、この四論は人間の考え方の凡ゆる場合を尽したものであり、その他に我々の考え得べきものはなく、それによって我々の種々な考え方が十分に尽されている」（山内得立、1974、p.71）、「しかもこの両否の論理（第三のレンマ—引用者注）が『中』の立場を啓くところのものであり、その上に立つことなしには両是（第四のレンマ—引用者注）の論理も成立することができぬ。第三のレンマはインドの論理の——殊に大乘仏教の論理の出発をなすとともに、その中核をなしている」（山内得立、1974、p.71）という。中の立場は、容中律のほか、ラーガールジュナの『中論』を意識している。

山内得立は、レンマの論理が修行を前提に含む論理で

あるという。「レンマの論理はもともと修習の論理であった。…レンマは行足の修といわねべきである。…行足にもそれ自らの理論がなければならぬ。何を如何に実践するかが行足の正しい有り方である」（山内得立, 1974, p.282）, 「体験の論理はロゴスでなくレンマであり, それなしには如何なる体験も語られえぬ」（山内得立, 1974, p.346）。体験し, 修行する学びは, 人格育成としての教育であり, テトラレンマの論理によって理解される。

山内得立は, 臨済宗の教育にレンマの論理を見出して『ロゴスとレンマ』の著作を閉じる: しかしそれにしても四科棟が臨済教化の中心に置かれているのはなぜであるか。我々は安んじてこの論理をレンマの中軸として挙揚し, 併せて東洋的な思惟の論理を西洋のロゴスの論理から明別するよすがとしたい(山内得立, 1974, p.378, 最終頁)。しかしもちろん, レンマの論理は曹洞宗の修行をも支え, 体験の論理として, 哲学的体験を語り, 同時に物語を通して自分を体験する理解に通底する。体験を通ず理解はレンマの論理に拠るべきである。「体験の論理はロゴスではなくレンマであり, それなしには如何なる体験も語られえぬとすれば尚そこに無分別の論理というものがないければならぬ。そしてそれが第三のレンマであるべきことは余りにもしばしば述べられたが, いくら繰り返しても過ぐるということはない」(山内得立, 1974, p.346)。

テトラレンマに於いて論理展開の核心は, 両否である第三のレンマにある。「このことは大乘仏教の創始者龍樹(Nāgārjuna)の論理を瞥見しても容易に看取することができるであろう。彼の『中論』の劈頭第一偈は, 諸々の有体が『不生不滅, 不常不断, 不一不異, 不来不出』であることの主張であった。この有名にして果敢な論法は明らかに両否の論理の表明であり, まさに第三のレンマの主張に非ずして何であろう」(山内得立, 1974, p.72)。テトラレンマは, 第三のレンマの両否によって, より高い次元に至る修行の, 物語を体験し成長する子どもの意識形成の論理となる。

ここから先, 事柄に即して詳しくつながりを臨床的に記述するために意識の具体において論じる。意識を具体的に連想マップによって論じる。連想法を使うと, 集合的な意識の様相, 集団脳を連想マップとして示すことが

できる。連想マップは, 人が場において集団として何を考えるかを, 場の意識の様相として可視化する。さらに体験を経た前後を比較して, 成長する意識を解明できる。前後の意識を比較し, 変容を明らかにし, 意識の様相に沿って臨床的に論理を抽出する。

最初に3として, 今日の長崎の平和意識の浅さを見る。犠牲者意識ナショナリズムの枠内でうごめく平和意識は, 上滑りになっている。すると別の道, 自分の命の大切さに支えられた平和意識が醸成されていだろうか。自分の命に根づいた平和, つながっていくアクターが世代を超えて平和を形作る可能性を, 次に4として論じる。

### 3. 犠牲者意識ナショナリズムのなかの平和の危うさ

長崎における戦争体験者の語りや平和運動などによって戦後形成された平和意識は, 大学生においてシンボルで表されるとともに, 批判的歴史的反省のない個人の世界に閉じた様相をみせる。大学生の意識には, 戦争のない状態としての平和と, シンボルとしての平和と, 個人の意識に閉じた平和の, 3つの様相を見てとれる。

2022年に長崎市内の2つの大学の学生59名に〈平和〉の連想調査をおこなった。その意識の様相を連想マップとして, 図1に可視化した。図1に, 次の4点を認める。

1. 平和は, 「戦争」と対比する二分思考によって意識されている。
2. 最近の戦争, 「ウクライナ」「ロシア」が想起されている。
3. 「長崎」「広島」「ハト」など, 平和はシンボルである。
4. 平和の内容は, 「幸せ」であり, 「笑顔」「家族」「優しい」「安心」「安全」「楽しい」と, 個人の領域に収斂する。

一言でいうと, 平和は自立していない。1.2.の戦争に依存し, 3.のシンボルは, 平和を支える個人の行為, 教育, 人権, 福祉, 社会, 国家, 国連, 思想など具体のイメージを伴わない。4.個人の思いは, 個人内の感情に収束し, 人や環境とのつながりのあり方が, 反省された意味によって語られることなく, その思いは戦争やシンボルとは離れている。

## 連想マップ(Association Map)

Date: 2022.5.24&26      Module Version 5.01      produced by Kohtaro Kamizono  
2022年長崎市の2大学での連想調査      Cue Word: 平和

回答者数: 59名, 回答語種数: 168種類, 回答語総数: 423語, エントロピ: 6.37, 連想量総和: 25.30

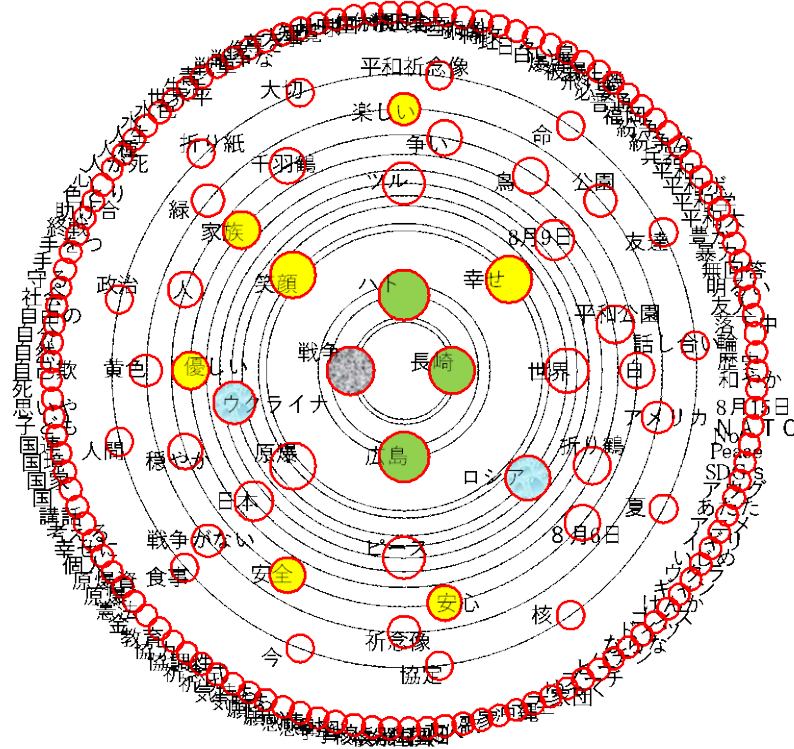


図1 2022年の長崎の大学生の〈平和〉意識

連想法は、提示語、この場合〈平和〉から思いつく言葉を50秒でできるだけたくさん書いてもらう方法で、集団の想起を集め、臨床の考えによる連想心理学と情報論に基盤を置いて、連想ソフトによって回答語を情報処理して、ここに示すような連想マップに可視化する。中心部に位置する回答語ほど多くの人が想起した言葉である。

連想において、回答者数比 36.8% (1/e) を越える回答語は定義域にあると見なす。この集団においては、「長崎」(回答者数比 57.6%)、「戦争」(54.2%)、「ハト」(42.4%)、「広島」(37.3%)が〈平和〉の定義である。「戦争」は平和の定義に欠かせない、あるいは平和は「戦争」なくして考えられないことがわかる。

〈平和〉から、「長崎」「ハト」「広島」(緑色で示す)が、シンボルとして意識される。しかし、シンボルを意味づける言葉が伴っておらず、浮いている。

〈平和〉の内実となる回答語を探すと、「幸せ」(回答者数比 20.3%)、「笑顔」(18.6%)、「優しい」「家族」(いずれも 8.5%)があり、黄色で示した。これらは個人の領域からの回答語、個人の幸せや優しさである。平和を形成する社会のあり方が想起されることもなく、政治のあり方に意見が出るわけでもなく、地球環境の課題解決のための平和が意識されるわけでもなく、平和教育が特筆されるわけでもない。平和へ向かう行為、社会、政治、地球環境、教育は抜けたままである。

(連想法については、上藪恒太郎, 2017, 連想法による道徳授業評価 教育臨床の技法, 教育出版, 参照)

図 1 の連想マップに現れた意識の様相は、上菌恒太郎、2014 に記した大学生 266 名の調査時点から、ウクライナとロシアが新しく登場するだけで、構造は変わらない。平和は、戦争に依存して自立せず、シンボルとして浮き上がり、平和の内実は個人の「幸せ」「笑顔」「優しい」に収斂する。2022 年の大学生は、被害者でもなく加害者でもなく、戦争と平和のシンボルを知ってはいても、個人の身の回りの平和を思う。

この平和意識に認められた 3.シンボルの背後の空白、平和な社会をつくる意識、平和に向かう政治の意識、世代を超えて平和をつなぐ意識、が見られず、地球環境のために人類の平和が必要との意識がない。この空白は大きい。平和は、大きな空白の上に漂う浅さに止まり、自立していない。

平和についての図 1 の意識構造は、大学生に限らない。長崎市内の小学生においても、60 歳代女性を中心とした連想調査においても、同様であった。

2023 年 5 月 1 日の小学校 6 年生 25 名の連想調査でも同様の平和意識の構造が見てとれる。「戦争がない」「戦争」「戦争しない」が合計 48.0%想起され、最近の戦争「ウクライナ」「ロシア」（各 8.0%）が想起される。戦争と対比した平和の他は、「広島」（回答者数比 28.0%）、「ハト」「長崎」（いずれも 24.0%）が平和意識の中心であり、ほかに「大事」（12.0%）、「幸せ」「笑顔」「争わない」「大切」「虹」「平和主義」「命」（各 8.0%）など、個人の領域からの言葉が多く並ぶ。子どもは、戦争について聞いていても、平和とは何かを聞いていない。まして、平和をどうつくるかの話を聞いていない。若い世代が、どう平和を形成するかイメージのない空白を憂慮せずにはいられない。戦争の裏返しとして語られる平和からは、今のあなたたちはいい、と言われるだけで、若者の抱える課題について語られないのだろう。そう考えると、平和意識が、戦争とシンボル以上ではなく、現代と個人と子どもの課題に答える力のない様相であることを理解できる。人類のつながりのあり方や地球の課題が入らない平和の話は空しい。

図 1 に現れた平和意識の浅さが、上菌恒太郎、2022、映画「万引き家族」の観客の映画前後の意識変容に露呈した（図 2）。

映画「万引き家族」を観た観客は、大学生からも少し世代があがって、長崎市および諫早市（諫早市は長崎市に近く通勤距離圏にある）の観客、60 歳代の女性が 52.2%を占める観客 74 名である。この観客においても映画の前の〈平和〉意識は、2019 年の〈平和〉大学生（図 1）と同様だった。むしろウクライナは登場せず、「戦争」（回答者数比 36.7%）で、あと「原爆」「長崎」「ハト」「広島」とシンボルが続く。各地から集まった大学生よりもこの観客は長崎色が強い。そのほか「大切」「未来」（いずれも回答者数比 13.3%）、「安全」「家族」「守る」「心」「生きる」の回答語が続く。

この意識状況から、映画「万引き家族」を見てしまうと、〈平和〉は映画と直接関わりが無いにもかかわらず家族小説と言える映画に引き込まれて、映画の後、「戦争」（回答者数比 29.2%減少）、続いて「ハト」「長崎」「広島」も減少し、「原爆」に至っては意識から消失した。増えたのは、「思いやり」（回答者数比 9.5%増加）、続いて「優しさ」、「安心」、「幸せ」であった。図 2 をカテゴリで見ると、《戦争》と《象徴》という平和意識を構成していた要素が有意に減少し（ $p<.05$ ）、「思いやり」を含む《考え》カテゴリが増える。つまり、ウソで成り立つ万引き家族でも、思いやるつながりによって家族である、と 60 歳代を中心とした女性たちは考えるようになった<sup>12)</sup>。

そこから見えるのは、〈平和〉意識の浮いた軽さである。平和に関する政治や象徴や運動の意味は、60 歳代女性を中心とした意識にとって大きな比重を占める家族とは結びついていない。〈平和〉の内容は、大学生とも同じ、思いやりや優しさという身の回りの考えや感情である。そして〈家族〉の意味はつながりにある、との方向に意識が還元されている。

映画「万引き家族」を観た観客の〈家族〉意識は、「つながり」が回答者数比 14.3%増加し、続いて「愛情」「絆」「血縁」「優しさ」「温かさ」「心」「心のつながり」が増加する。「つながり」は家族において感じられるが、平和の連帯とは意識されない。戦争のない状態としての平和は、つまり先の図 1 の説明、大学生の 1.戦争と 3.シンボルは世間や他者と語る言葉の表層に属し、自分の生活をふり返った地平に根をもたないようだ。

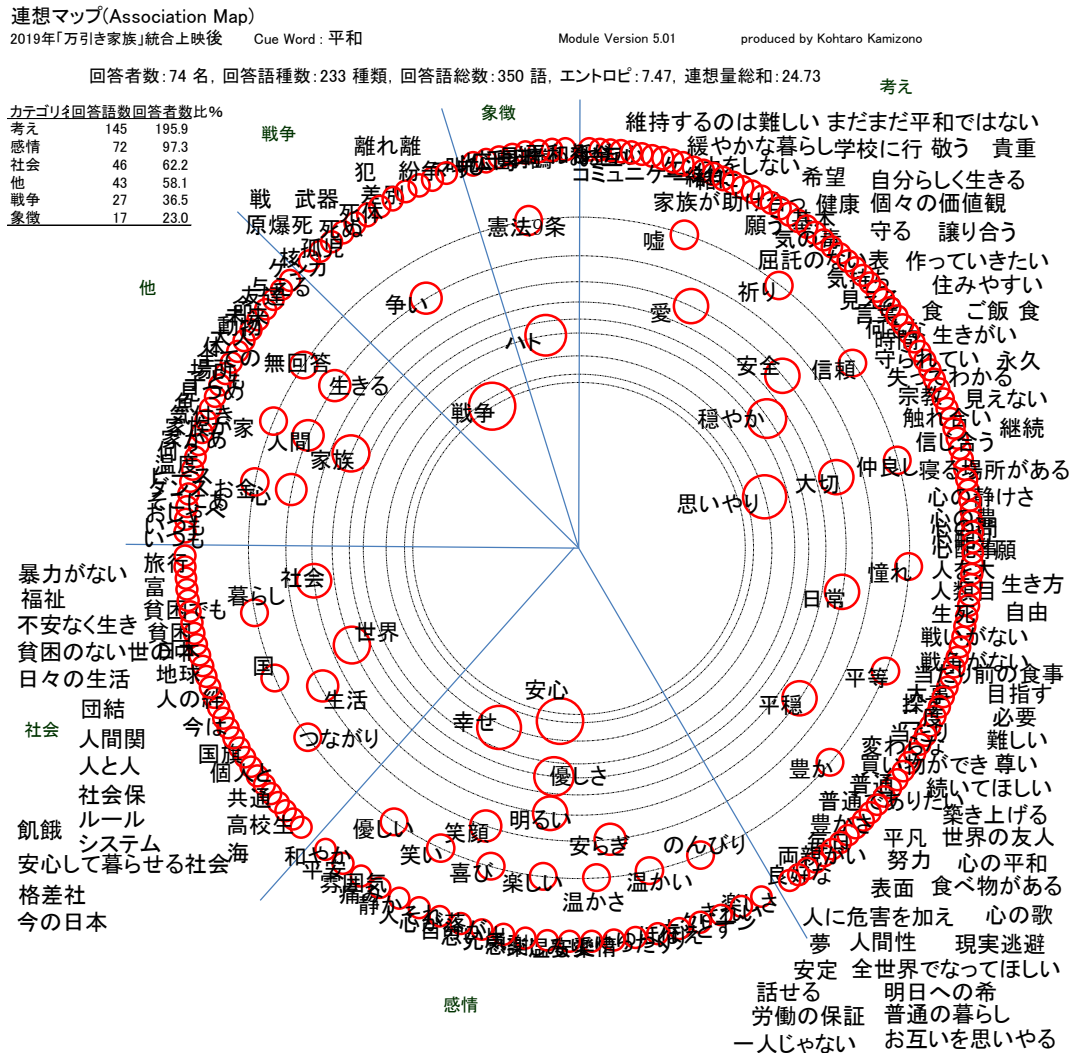


図2 長崎・諫早の観客が映画「万引き家族」を観た後の〈平和〉意識

この連想マップでは、回答語をカテゴリに分けてある。映画の後の平和意識において有意に増えた ( $p<0.05$ ) のは右側に位置する「思いやり」など《考え》であり、《戦争》と《象徴》(シンボル) に属する回答語は有意に減少 ( $p<0.05$ ) した。観客の意識は、個人と家族の意識「思いやり」「優しさ」「安心」「幸せ」へと流れた。戦争との対比や象徴で表される平和は薄れ、個人の意識と結ぶ根の深さはなく、個人が希求する平和とはつながっていない。

この観客において軽く吹き飛ばす平和意識を見てしまうと、死刑制度に、同調圧力に揺れる報道や言論に、戦争とシンボルに依存する平和運動に、空しさを覚える。家族のつながり意識に比べれば、平和は浅い。平和において家族のつながりは成り立つのだが。平和を支える運動と、個人が家族とつながる「思いやり」「優しさ」「安心」「幸せ」とのギャップが大きい。それは平和運動を

進める人々が感じる空しさの根源であろう。

すると課題は、この空しさを越え、世代を超えて、個人に根をもつつながる平和な社会、地球をつくる思考であろう。それなら、家族を思いやるつながりを平和の基盤にしたらどうだろう。個人の家族ではなく、人類の立場に立って、思いやる。個人から人類までを見通し、思いやる行為にまで導く論理があればいい。

中国の道徳教科書は、わたしたちは地球村に住む、と教える。同じ地球村ならば、自分の命も家族の命も住人の命も動植物も環境も守る気になるだろう。中国の道徳教科書は、中華の繁栄を志すところから自分をふり返る形を要請し、集団に包摂されて自分の意味を獲得する自己肯定感<sup>13)</sup>を涵養する構造をとる。中国の道徳教科書に登場する私の範囲は、クラスから学校、地域、祖国へと拡大するだけでなく、地球全体へと「地球村に暮らす私たち」へと広がる。分析した中国の教科書すべてに<sup>14)</sup>「地球村」の表現が使われ、「世界市民」の自覚を促す点は、国家に意識を閉じ込めるだけではない点で注目される。

家族が生活する地球村で、自分も人も動植物も環境もつなぐ平和が地球を覆うと、話はうまい。しかし、地球村の比喩の欠点は、そこに国家が入ってこない点である。戦争を準備する国家を視野に入れない地球村は、楽しい夢に子どもを引きつけて終わる可能性がある。

通底する論理展開のために、生命尊重を取りあげたい。平和の語りは、これまで平和論者が取りあげたような、差別でもいい、構造的暴力でもいいが、それはいずれも戦争と同様、〇〇のない状態と、平和を定義する形になる。平和をつくり出せる根底に焦点をあてたい。大学生と映画の観客のいずれも語る「思いやり」「優しさ」「幸せ」の平和に通底するのは、命への思いやり、優しさ、幸せだろう。生命尊重ならば、敵とも通底する地平に立てる、地球環境も入る、学校教育にも登場し、侵略を止めるよすがになる。生命尊重の具体に拠って、自分と現実を結びつけて考えられる。生命尊重は、個人に発しながら、人類としてのつながりを覆い、新しい。

#### 4. 生命尊重としてつながりを考える

生命尊重は、日本の教育において新しい<sup>15)</sup>。「教育ニ関スル勅語」（1890年、明治23年10月発布、以下、教育勅語）は、いわゆる12項目を道徳の内容としたが、生命尊重は挙げない。一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ、そして天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシという言う以上、命を、まして自分の命を大切にせよとは語らなかつた。

戦後、命が大切と言いだめたかということ、そうでもない。1947年3月の学習指導要領一般編(試案)の教育の一

般目標、4項目25の具体的な教育目標に、社会の文字は多く登場し9回に及ぶが、いのちや生命の文字は書かれない(文部省、学習指導要領一般編(試案)、1957年3月発行、pp.4~7)。ということは憲法9条は、戦争のない平和の地平にあって、しかし生命尊重の思想上の地平にはなかつたことになる。1947年8月に文部省が出した『あたらしい憲法のはなし』は、第9条を含む憲法について「国際平和主義をわすれて、じぶんの国のことばかり考えていたので、とうとう戦争をはじめてしまった」(文部省、1947、p.11)と率直に総括し、「戦争は人間をほろぼすことです。世の中のよいものをこわすことです。だから、こんどの戦争をしかけた国には、大きな責任がある」(文部省、1947、p.18)と言う。この説明を戦後の出発点にしたかと思うが、これにしても戦争に対する平和であり、平和の根拠は生命尊重にない。『あたらしい憲法のはなし』は、命は大切だから人を殺してはならず、自ら死を選ぶことがあってはならず、戦争をしてはならないと、平和を説くわけではない。あえて言う、国家目線の平和主義であって、自分と家族の命が大切と言わない。国家目線の平和主義の地平では、相変わらず国家が認めれば、死刑に処され、警察予備隊が正当化される、浮いた平和だったことが見えてくる。

生命尊重を打ち出したのは、1958年(昭和33年)改訂の、特設道徳を復活した学習指導要領である。当時しかし、道徳教育の復活には、日本教職員組合、日本教育学会、社会科の初志をつらぬく会など、反対の声が大きかった。1950年朝鮮戦争勃発、警察予備隊の創設、「共産主義的」大学教員の追放(レッド・ページ)の状況下、日本教職員組合は1951年1月24日の第18回中央委員会で「教え子を再び戦場に送るな、青年よ再び銃を取るな」のスローガンを決定する。

反対の声のなかで、道徳教育を特設するには、子どもや青年を戦場に送るつもりではない、と示す必要があったのだろう。その意図が、1958年の学習指導要領が生命尊重を道徳上の価値項目の冒頭に掲げた点に現れるように思う。これは、教育勅語いらいの国家中心からすると、日本の教育の転換である。個人と家族に根ざす、地球全体に広がる価値を持ち出したのだから。

この歴史の経緯を見ると、生命尊重をどう扱い、教えるかは、日本が戦争に向かうか否かをはらむ。2017年に



なるとしかし、少し引っ込める。生命尊重の項目は学習指導要領で小学校、中学校とも D と後ろに置かれて、「生命の尊さ」は目立たなくなった。命が大切だ、はあたりまえのようで、国家中心の歴史と教育ではあたりまえではなく、個人と家族から浮いた軽さで扱われていた。

生命尊重に焦点を絞り、個人に根ざしながら人類の立場に立って命のつながりをつくること、命が大切をあたりまえに押し上げることが本論の提案になる。人類という立場に立つ命のつながりは、人間の命だけではない。すべてのアクター、動物、植物、環境があって、人類は命を長らえる。人間と自然を二つに分けて、人間の命の方が大切だとするのではない。人新世と言われ、人間の行為が地球環境に、ひいては人間に影響する今日、地球表層の生命全体が絶滅危惧種だ。敵のミサイルだけが脅威ではない。生命尊重に焦点をあてると、環境問題も入られて、人類全体を考える立場に立てる。

人類という立場に立って命を大切にしようとする、国家の死刑制度と軍隊制度の両方に反対せざるをえない。個人が個人を殺すのは許されないが、国家なら許されるとの立論に、それはないと言える。国家ならば人を死刑にできる国と、侵略軍によって自他の人を殺す国とは、同じ地平にある。どの命も大切だと立場を堅持したい、その命には環境も含む。

人類の立場から、核廃絶に止まらず、軍縮、反戦を主張すべきだ。クラスター爆弾禁止条約や対人地雷禁止条約のように、自律型致死兵器システムの人に対する使用禁止、あるいは兵器と爆破の CO2 規制もおもしろい、人だけでなく地球環境破壊の観点から戦争に反対できる。

生命尊重を、今日の地球の状況に沿って押し広げたい。大人には話を一挙に広げた感があるが、次世代には地球村に住む感覚がすんなり通じる。小学校高学年を取りあげ、意識のしなやかさにおいて自分と人類と地球環境がつながる、愛媛と久留米の意識の様相を見たい。小学校高校学年のしなやかに広がる意識に驚かされる。

愛媛県の小学校 5 年生のグループが 2019 年に授業「ミサゴのいる山」<sup>16)</sup>において、自然と人間関係を表す概念図を自分たちで話し合い、図 3 のように描いた。筆者はこの図 3 に示された考えの深さに敬意を表する。

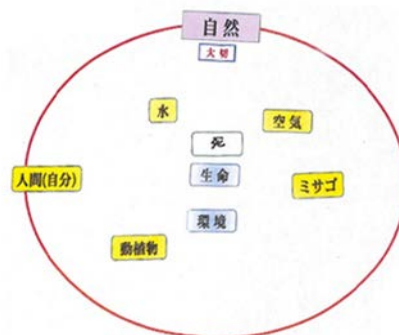


図 3 愛媛の子どもグループが描いた自然概念図

図 3 には 4 つの特色がある。

1. 「人間（自分）」が「ミサゴ」と「生命」の同一地平に置かれている。
2. 生命は「水」や「空気」を環境として共有している。
3. 「死」を、「生命」とともにあるとして、空白の概念カードに独自に書き入れ、概念図を作り上げている。死まで視野に入れる思考は深い。
4. 「ミサゴ」は自然の中に包摂されるのに対して、「人間（自分）」は自然の中にあるとともに自然から出る位置において捉えられている。

このグループが示した、死と生命を一体とする思考の力動、ミサゴと自分を生死をともにする同一地平に置く共感、人間を自然の内にあるとともに外にある存在として捉える思考のしなやかさは、排中律に縛られた二分法の論理ではない。二分法に拠る解釈では、子どもグループのしなやかな思考を掬い上げることができない (cf. 上菌恒太郎, 森永謙二, 2022, p.2)。しなやかな思考において、自分と結びつく平和を、家族、動植物を含めて考え、地球に広がる平和の歩を進められると思う。

図 3 の意識から出発して筆者は、子どもの意識変容をテトラレンマの論理に拠って理解することが妥当であると考えた。それはしなやかな思考を、思考体験を通じて成長する臨床の論理において理解することを目指す趣旨である。テトラレンマは、体験しながら考え成長するしなやかさを理解する教育臨床の思考様式である。

次に掲げるのは、久留米の小学校 6 年生の授業「木を植える」<sup>17)</sup>の資料である。

## 木を植える

「八月に中国の砂漠に行って植樹する。いっしょに行かないか」と、祖父に言われました。ぼくの家は、祖父も父も植木職人です。ぼくは、木は動かない、木を植える仕事をしている人は生まれた町周辺で一生を終わると思っていたので、海外へなんてびっくりしました。

中国のゴビ砂漠の端っこであるクブチ砂漠は、むかし美しい草原だったそうです。でも 1960 年頃から、人口が増え、畑になっていき、放牧されて移動していたウシやヒツジやヤギが、囲われて飼われるようになります。すると、草は生える場所と時間を失い、草原が砂漠になっていったそうです。砂漠は広がり、結局 100 万人以上の農民が土地を失い、食糧不足になったそうです。

1990 年代になって、クブチ砂漠に木を植える日本人が現れます。砂に穴を掘り、苗木を植える人を見て、「どうせ無駄だ」と現地の人はあきれました。現地の人が思ったとおり、苗木を植えても、穴が浅くて枯れ、木の種類が砂漠に合わず、砂嵐に埋もれて、苦労の手探りが続きます。それでも日本人ボランティアは、ポプラを選んでひたすら植えました。もとは緑だったと分かっていたし、地下に水分があると分かっていたし、木が根を張って砂を固定してくれると確信していたのです。

ポプラは、成長が早く、苗木が安く手に入ります。苗木は、4 メートルの長いものを使います。水を感じとれる深さから地表に顔を出して、舞い上がる砂に埋もれず葉を出す長さです。ポプラは、育つと燃料に使えます。10 年ほどでポプラが森になった後、マツやカエデなど多様な種類の木を植えて森を育てます。

数年たち、ポプラの木がしげり、砂漠に緑が戻りはじめると、「できるんだ」と、いっしょに植樹する地元の人が出てきました。動かない木が、人の心を動かしました。話を聞くうちに、ぼくも行ってみたいと思いました。

中国の首都北京まで半日、北京からさらに 15 時間かけて砂漠に着いた私たちは、次の日から植樹を始めました。夏には気温が 50℃近くになります。帽子にタオル、軍手、長袖シャツで、掘り上げた砂の色が湿り気を帯びて茶色になる 1 メートル下まで掘ります。掘った穴の底にスコップをたててなお握りこぶし 2 つ分が目指す 1 メートルです。両ヒザをつけてさらさらの砂に穴を掘るのは、つらいです。穴の底に水分を確かめて、苗木の根元を吸水するシートで包んで助けます。

一つの穴に、ぼくは 30 分かかりました。仕事なれしている祖父は 15 分で掘るのに驚きました。さすが植木職人です。

一日が終わり、小高い丘から、植えたポプラを見ていると、祖父が「緑を見ると心が落ち着くな。どこで植えても植木職人だ。」と、にっこりしました。

日本の植木は、鑑賞されます。中国の砂漠では、土を守り、命を支えます。命のために木を植える、そう思えます。砂漠に緑が生まれると、昆虫が来ます、昆虫を食べる小動物が来ます、木が吸い上げる水によって、雲がわき、大地に水の循環が生まれます。動かない木が、水のめぐりと命のめぐりを動かす、木を植える仕事はすごいと思います。砂漠の地平線に沈む太陽を浴びた木を見ながら、木を植える大切さを知りました。



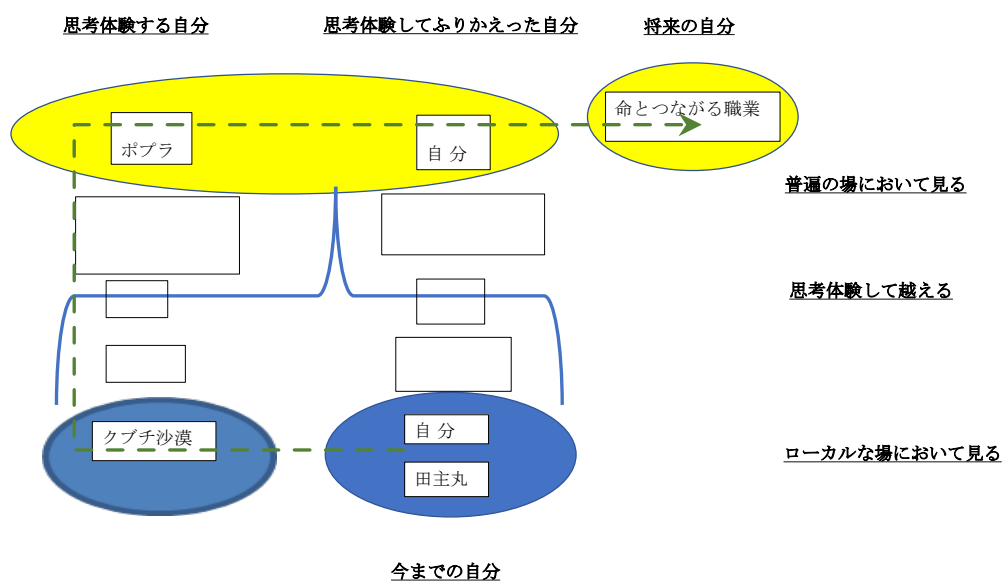


図4 思考体験による子どもの意識変容概念図

以下、授業「木を植える」における生命尊重の、小学校6年生の意識の動き分析した、上菌恒太郎，森永謙二，2022，「テトラ・レンマの思考による生命尊重の授業分析—国際道徳授業『木を植える』—」を取りあげる。2017年福岡県久留米市田主丸町の川会小学校6年生を対象にする国際道徳授業「木を植える」は、学習指導要領の生命尊重を内容項目にした。図4は、本授業における子どもの意識の移りゆきを示す。

「木を植える」は田主丸から出かけて、砂漠緑化のために中国のクブチ沙漠<sup>18)</sup>に植樹する話である。田主丸は、植木の町として名高い。子どもたちは、地元の人々、木を植えるに行った中学生に自分を載せて追体験した。

授業の目的は自己肯定感の育成、価値項目のねらいは生命尊重であり、道徳の時間に授業をおこない、主に連想法によって子どもの意識変容を探った。授業が価値項目の教え込みに止まらず、教育として子どもに意味をもつために、授業の目的を、子どもが自分で考え判断する基盤となる自己肯定感の育成においた。自己肯定感の育成は子どもが自分で成長する土台づくりである。生命尊重の理解に止まらず、命を大切に作る基盤となる自己肯

定感の育成が、子どもをアクターにする。

以下、図4によって説明する。図4の下方の青い部分は、授業前、ローカルな場（田主丸）にあって発想する子どもの思考である。子どもは田主丸のローカルな場から、授業資料の物語に乗って、もう一つのローカルであるクブチ沙漠へと思考体験の旅をする。旅において子どもは、自分のローカルな属性や田主丸の眼前の具体から解放され、沙漠にポプラの木を植え、緑化の作業を体験する。子どもの思考体験による旅の過程を緑の破線で現した。沙漠でポプラを植える思考体験によって、ここから黄色の世界に入る、ポプラの意味を自然をつくる命の木であると、つかみ、沙漠に命あふれる自然の再生を見出し、翻って自分が命である（図6）と、よみがえる沙漠に自分とポプラと通底する命の本質的な思いに至った。そして授業進行に応じて、自分の将来のキャリアを、命とつなげて考えた。

授業前、子どもは田主丸にいた自分を、主に、田主丸の具体の産物、ブドウ、河童、柿、を知り、眼前の自然風景、耳納連山、筑後川、のなかで、好き・嫌い、できる・できないなど、属性に拠って語っていた（図5）。

連想マップ(Association Map) Module Version 5.01  
 川会小「木を植える」事前 Feb. 2017 Cue Word : 自分 produced by Kohtaro Kamizono  
 回答者数 : 14 名, 回答語種数 : 66 種類, 回答語総数 : 78 語, エントロピー : 5.93, 連想量総和 : 19.21

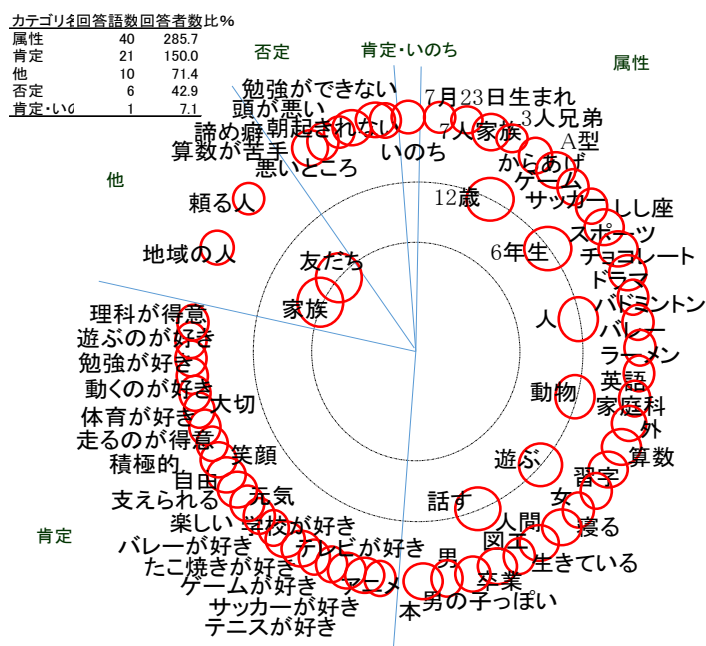


図 5 田主丸の小学校 6 年生の授業前の〈自分〉意識

子どもは授業前、自分の《属性》によって自己を認識していた。時間意識として「12 歳」「6 年生」、生物のなかの「人」「動物」、そして友だちなどと「遊ぶ」「話す」(いずれも回答者数比 14.3%)で、ローカルな場にある自分認識である。また、自己《肯定》が《否定》よりも多いことから、過ぎしやすい学級だと見受けられる。

《肯定・いのち》(図の上方)は、授業後と比較するため《肯定》とは別に切り出した。

それが沙漠で木を植える思考体験をしてみると、植えたポプラは、命あふれる自然をつくる木であり、命を生み出していた。人は、沙漠に木を植えるアクターであるが、沙漠に植えられて日夜緑化に励むアクターは、ポプラである。子どもは旅する物語体験によって、自分を他と線引きして区別する属性の語りから抜け出て、自分は「いのち」であると認識した(図6)。命の場に立ったとき、子どもはすべての地球上の命と同じ場に立っている。命という地球表面の場のあり方を、通底する普遍<sup>19)</sup>と記しておきたい。

通底する普遍は、地球規模のローカルであり、グローバルと言わないのはローカルのないグローバルが存するかのような二元論の言表を避けるためである。ローカルのつながりとして、つながりを意識するローカルとして、ローカルの成長として命という本質的な共通性への方向

があるなら、通底するつながりを意識した普遍であるローカルが生まれる。

子どもは沙漠を知って、植物があり動物がいる自然は、大切で守るべきであるだけでなく、人間(自分)が関わって命あふれる様相があり、自分もまた命のつながりに関して存在している通底する普遍に気付く。田主丸の自然のなかにいた自分は、思考体験を通じて一度沙漠に連れ出され否定され、ローカルからローカルへと渡り歩くことを通じて、通底する普遍の意識へと越えた。すると、人間(自分)が行為して、木と協同してはじめて命あふれる自然がある、と見えてくる。ポプラは沙漠で命の木として、アクターだった。ふり返ると、自分は命そのものであり、命のネットワークをつなぐアクターだとの理解が生まれる。それが図6の「いのち」だろう。

連想マップ(Association Map)

川会小「木を植える」授業後 Date: Feb.2017 Cue Word: 自分 Module Version 5.01  
 回答者数: 13名,回答語種数: 53種類,回答語総数: 64語,エントロピ: 5.46,連想量総和: 15.56

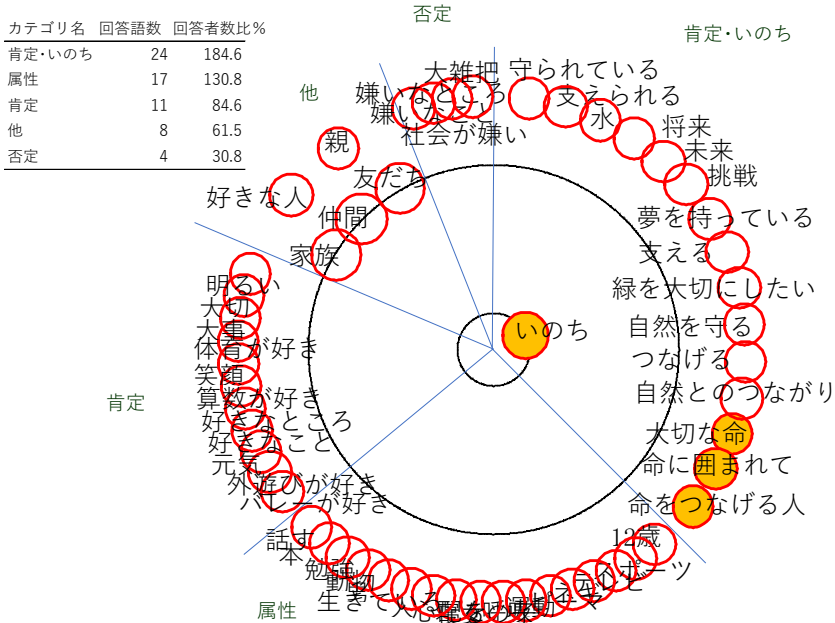


図6 田主丸の小学校6年生の「木を植える」授業後の〈自分〉意識

図6に見るべきは、自分は「いのち」だとの認識が、学級の合意になり、自分の定義になっている点である。定義であるとは、その語を想起しなかった者も、言われれば、そうだね、と答える様相を示す。「いのち」と関連語を山吹色で示した。彼らは授業後、〈自分〉を「いのち」(回答者数比 69.2%)だと宣言し、自己肯定した。子どもたちの意識に自己肯定が、《肯定・いのち》に一般的な自己《肯定》を加えて、有意差(p<.01)をもって増加する。そして図6の連想マップは、〈自分〉は「いのち」だ、がこの子どもたちの自分認識の真ん中であることを示している。

さらに《属性》が有意に減少(p<.01)した点からすると、子どもは、ローカルな場で属性によってばらばらに自分を認識していた授業前から、授業後には通底する普遍の場で自分を「いのち」として認識するに至っている。

〈ポプラ〉について、子どもが授業後に「いのち」(回答者数比 61.5%)の「木」(69.2%)で「自然」(46.2%)をつくと、この3語で定義した連想と併せると、〈自分〉の命は、命の木である〈ポプラ〉と通底しており、共にアクターとして砂漠緑化に貢献する認識を読みとれる。

そこから子どもはさらに行為へと、自分のやりたい仕事を見通す態度に至る。命である自分、命をつなげる自分、つながる命のために行為する自分の場として将来の仕事を夢みる。通底する命の普遍のために自分を活かす、その方向に子どもの意識は動いた。

自分は「いのち」であるとの思いに至る過程は、自分探しの旅である。日常のローカルに埋もれた意識から出て、異質の場を体験し、自分を見出す旅として子どもは「木を植える」物語と授業を体験している。授業進行に

従って思考体験する意識のなかで、子どもは、田主丸から離れて、対象化して自己認識する二分法を越え、命であるとの通底する本質において自分を認識した。自分が命であるとは、ポプラと通底する自分にもともと備わる姿の反省的認識である。新たな認識へ至る過程で子どもの意識に変容が起こり、授業前の回答語全体の74.2%が剥がれ落ち、授業後には67.9%の新出の言葉で自分について考えた。自分について、図6に至る回答語の変容はとても大きい。子どもは、自分が命であるとの認識を得

て自己を肯定したほか、人類と自分の命を持続させる未来へと向かう態度に行きつき、その自分は肯定できると自分に新たな価値を見出した。

授業後の〈いのち〉の連想、ならびに他の提示語〈ポプラ〉、〈自然〉、〈田主丸〉、〈自分〉による連想を総括すると、命は自然にあり、植物、動物、人にあり、人がつなげる命あふれる自然が認識され、沙漠においてポプラは命ある自然をつくる木としてアクターであり、自然は大切であり人間（自分）が守るもの、田主丸というローカルもまた自然の一つの場であり、自分は何より命である、と要約できる意識の様相を見てとれる。

授業後の子どもの〈自分〉意識の変容（図 6 の意識）から、子どもは、自分の将来の仕事、介護士、ロボット開発者、学校の先生、医者などと語り、自分のキャリアを命によって意味づけた。命である自分が、命の網の目のなかで、命のために働く。すると授業の場にいる子どもの意識は、命の相即相入の状態にある。ローカルとして否定された自分が、田主丸と沙漠を二つながらに命として他のアクターと共に肯定する認識に立った。

この、命の普遍の場に至った子どもに、敬意を表する。子どもは通底する普遍によって、地球規模のローカルに至り、命の相即相入を示している。

もとをたどれば、クブチ沙漠に木を植え始めたのは、遠山正瑛、元鳥取大学農学部教授である。1972 年、遠山正瑛は内モンゴル自治区のクブチ沙漠緑化に取り組むため、1991 年 NGO 日本沙漠緑化実践協会を設立した。遠山はクブチ沙漠が土の下に水分を含むことを見出していた。遠山には、15 年戦争の贖罪、その後の日中の感情的齟齬、交流による相互理解への思いがある。田主丸町は、1991 年遠山正瑛の講演をきっかけに、植木の里として国際貢献の舞台に進み、クブチ沙漠に出かけて木を植えた。

本授業はしかし、こうした大人の物語を伝えなかった。授業が育てるべきは、子どもの出発点となる、自分が命であるとの通底する普遍の認識である。田主丸にいる自分の二元思考を、思考体験としての沙漠での緑化体験を通じて捉え返して否定し、自己肯定感を抱けば、子どもは通底する普遍の場から自分で未来へと向かう。平和の語りも、大人にとって伝えたい物語よりも、子どもが自分で平和な未来へと向かう場を構成する必要がある。そ

こに世代をつなぐ平和教育の教育としての要件がある。

子どもが切り開いたのは、自分を命として肯定することによって、つながりの視野を地球上に広げ、世代をつなぐ平和であり、幸せで、思いやり、優しい生き方の場である。本授業で子どもは、植物、昆虫、動物などと通底する命の普遍を見出し、自己肯定感に立って、二分法を越え国境線を越えて、地球規模の人類の課題に応える方向で、自分の将来を思い描いた。それは、自分の将来の意味を「いのち」に見出す職業選択であり、自己肯定できる生き方を選択する姿勢である。子どもが人類の未来を自分の未来として歩む土台づくりに、教育の意味はあるだろう。

田主丸の子どもたちは、長い旅となった意識変容過程を、60 分の授業時間として集中した。大した子どもたちだ。この授業は、子どもが人類にとっての通底する普遍の場へと飛躍<sup>20)</sup>でき、命の自己肯定に達することを、明らかにした。その際子どものしなやかに飛躍する思考をテトラレンマによって理解できると、明らかにした。

ローカルからグローバルへ抜け出して命の普遍へ飛躍し、通底する命のための職業選択をする子どもたちならば、地球規模で平和を構築できるだろう。

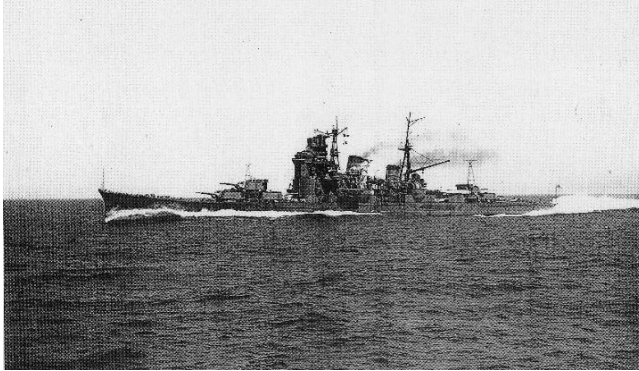
授業「木を植える」は、大きな意識変容を生んだ。同様の授業を継続したい。継続するために、さらに 2 つの資料を掲げておく。「人間らしい生き方」<sup>21)</sup>と「とけていった差別意識」<sup>22)</sup>である。

巡洋艦の水兵として戦争を体験した藤井昇は、自然そして人のつながりに生きることが人間らしいと語る。語りは実名である。

高比良マシヨは、看護師として戦争を体験し、個人にも責任がある、自分にはアジアに平和を作り出す責任がある、と言う。彼女の語りも実名である。

次頁から 2 頁にわたる資料「人間らしい生き方」において、藤井さんは、二元対立よりも、命のつながりに生きることが人間らしいと誇りをもって語る。

## 人間らしい生き方



(重巡洋艦 妙高)



(藤井昇さんの漁船)

私は、藤井昇（ふじいのぼる）です。対馬出身です。15歳のとき志願兵として昭和18年8月10日佐世保相浦第2海兵団に入隊しました。第2次世界大戦が終わる2年前です。昭和19年4月28日、16歳のとき巡洋艦「妙高」に乗りました。妙高は最新鋭の重巡洋艦で13,000トン、レイテ海戦のときに指令官を乗せる旗艦でした。艦上に、20センチの大砲や飛行機を飛ばすカタパルトを装備していました。

船内では、「藤井さん」と名前では呼ばれることはありませんでした。「さしす 52564」と記号で呼ばれます。「させぼ・しがんへい・すいへい・52564（ごふたごろくよん）番」という意味です。志願してから、日本はどの海戦でも負けていました。私は3番砲塔の役でしたが、1番、2番砲塔が前にあるので、横にしか撃てず、撃ったことはありません。砲塔は、戦艦用の大砲です。

悲惨だったのがフィリピンでのレイテ海戦です。旗艦なので最初に狙われました。「対空戦闘配置につけ！」の合図で、高角砲や機銃に弾薬を運んでいました。そのとき敵のグラマン戦闘機が海面すれすれに現れ、魚雷を落として急角度で上昇しました。みごとな攻撃でした。魚雷は、妙高の後尾に命中し、4本あったスクリューが全部やられ、操縦不能。浸水。船の応急班が、すぐにマンホールと呼ばれるハッチをしめて、他への浸水を防ぎます。船尾は第3居住区ですが、そこにいる兵士たちの逃げ道もふさいでしまいます。

グラマン戦闘機は魚雷の他に50cmほどの間隔で機銃照射してきます。私のとなりでいっしょに弾薬を運んでいた白川さんがたおれました。50cmが生死を分けました。恐怖を感じる間もありませんでした。

戦闘がない日は、しごきがありました。若い兵士の食事は魚とイモを煮てあり、量がありません。上官の食事は豊かであるくらいありました。若い兵士が当番制で片づけるのですが、空腹に負けて食べてしまうことがありました。見つかりと連帯責任として18人から20人の班全員が水で濡らした軍人精神注入棒で1人5回から6回お尻を叩かれます。腰骨にあたると、化膿（かのう）して肉がくされ、死にいたることもありました。しごきに耐えられず、自殺する者もいました。戦闘で死んでも、しごきで死んでも、皆「名誉の戦死」として親元に伝えられました。

昭和20年8月、私のいたシンガポールでは、16日に終戦が伝えられました。その後、イギリス軍に捕らえられ2年間マレーシアのジョホールバルで、道路の補修や森林伐採をしました。昭和22年6月21日、19歳の終わりに針尾の浦頭（うらがしら）へ帰ってきました。（今、針尾島にはハウステンボスがあります。）終戦後、139万1000人（佐世保市の現在人口の5倍ほど）の人が針尾に帰ってきました。



対馬に帰ってみると漁師をしていた父は、私が戦争に行つてすぐ亡くなっていました。残されたのは、母と兄弟7人と2反の小さな畑だけでした。船もなくなっていました。私は長男として、母と兄弟7人を養わなければなりません。お金を借りて2トンの小さな舟を買い、14歳のころ父から教えてもらった延縄（はえなわ）漁で、タイやアラヤアコウを釣りました。釣った魚を韓国の釜山に売りに行き、船の油を買って帰りました。日本には油がなかったのです。

2反の畑で、イモやムギを作りましたが、自分たちで食べる量もありません。それでも地域のために供出を求められました。自分よりも貧しい人がいるので助け合うのは当たり前だと思いました。イモしかないお弁当を持ってくる人もいたのです。コメを作っている家は1軒しかなく、その人もコメを供出していました。コメは貴重で、祭りや正月などの行事のときにしか食べられません。

建網（たてあみ）漁をしていて、日が暮れて海が荒れた時がありました。網を引き揚げようとして、プロペラにかまってしまいました。船は操縦不能のまま、真夜中のひどい波で岩に打ちつけられました。その瞬間に飛び降りたので命だけは助かりました。親せき2人は、波に強い大きな船で海岸を探していたそうですが、あきらめて、陸に上がったそうです。2人は、夜が明けて、山を越えてきた私とちょうど出会いました。家族は寝ずに待っていたそうです。私を探し、心配してくれた人がいて、うれしかったです。よく助かったものだと思います。

今でも1トンの舟で延縄漁をやっています。暗いうちから海に出ると、ふと戦争のことを思い出します。助け合っている今の暮らしがいいと思います。生まれた島の海で、父から教えられた延縄を仕かけて迎える朝が楽しみで、やる気がわいてきます。自分のできることをやって、食べていけて、人も食べさせることができるのは、ありがたいことです。

人と助け合い、自然とともに生きる今の生活は、貧しくても満ち足りています。人間らしい生き方だと思います。

藤井昇さんは、実名で語ることに気概がある。戦争の際、彼は名前を奪われていた。そして、帰国後、警察予備隊に誘われ、入れば給料もよかったが、自分のつながりに生きる道を選んだ。それは、海に生きる道であり、自然に生き、国境にとらわれない道であった。

そこに、次の4点を認める。

1. 自分で、つながった人たちの命を紡ぐ仕事をする、海というつながりにある動植物の網の目に生きる、それは人間としての誇りである。ローカルな場の生活に見えるが、内実は通底する普遍の生活である。
2. 陸の国境にとらわれず、海に生きる。対馬、釜山、長崎、福岡は陸の拠点であり、藤井さんは海によって陸をつないで生活する。戦いを起こしうる線を越えて、またはいくぐって、自然ならびに命のつながりの普遍に生きることを楽しむ。
3. 海に命を預ける点では、魚と自然と自分とは、同じアクターとして、海につながりとして通底しているのだろう。つながり合う人が、藤井さんの意味を支える。

4. 私は藤井昇です、と名乗りを上げて、自分のつながりにおいて自分として生きる姿勢に誇らしさを感じる。名乗りは、他者に呼びかけるとともに、自分の耳に聞かせる自分への呼びかけだろう。名乗ることのできる生き方は、誇りであり、人間らしい生き方である。

次頁から2頁にわたって資料「とけていった差別意識」を掲げる。

## とけていった差別意識

高比良マシヨさんは国のために尽くそうと看護婦を志望しました。家が豊かではなかったせいもあって、早く自立したかったし、二人の兄が兵隊に行き、国のためにという教育をそのまま信じて育ちました。十七歳の四月に看護婦試験に合格、女でも兵隊さんのように尽くせるのは日本赤十字の従軍看護婦しかないと思い、志願しました。

従軍看護婦は不足していたので、三ヶ月間日本赤十字の教育を受けると、「召集令状は後で出すのでとにかく現地へ行ってくれ」と言われ、一九四三年に中国に渡りました。中国で一週間の厳しい訓練、看護婦としてだけでなく、軍の命令に服する訓練を受け、精神的に全く余裕を失い「精神がどうかなるんじゃないか」と思いました。配属された延吉陸軍病院は、前線で負傷した兵士を看護することはほとんどなく、全部で二五〇床の発疹チフス病棟と伝染病病棟で、日本軍の管理下、二年間働きました。

一九四五年八月に、ソ連が攻めてきたと伝えられ、病院は混乱しました。いつでも死ぬるようにと青酸カリをもらい、徹底抗戦するために山に立てこもる話が出ましたが、結局病院に残ってそのまま仕事を続けました。ソ連軍の支配下では、時々見回るソ連兵の姿だけで、仕事はそれほど変わりませんでした。一二月になると、日本軍に置き去りにされた少年兵が何人も凍傷だらけになって逃げてきました。その頃はしかし、ベッドは患者であふれ、薬もなく、コーリャンや粟などの食べ物くらいしかないありさまで、マイナス二〇度の寒さの中、毎日五、六人の若者が凍傷の治療を受けることもできないまま力尽きて亡くなりました。そのときの無念さ、看護もしてやれず命を失っていく人を見る無念さは、今でも忘れられません。

一九四六年にソ連軍が引き上げるとき、日本の病人はほかに移され、そのあと病院は東北民主連合軍の管理になりました。日本人の引き上げが始まり、帰れるかと思いました。しかし期待は裏切られ、「病院に残ってもらいます」といわれたときには、もううんざりだと思いました。

看護の仕事の続けながら、思想切り替えのための教育を受けました。でも、内心は反発していました。やがて温和な教育係が来て、「生活や任務で困っていることがあったら言ってください」とマシヨさんたち残った看護婦の不満を聞き心をつかんでいきました。マシヨさんも、日本が負けた理由を理解するようになり、現実を受け入れるようになってきました。病院には、朝鮮族をふくむ中国人の少女が看護にあたり、マシヨさんはその少女たちを教育しながら、看護の仕事の続けました。彼女たちは、介護技術や知識を早く学ぼうとして、礼儀正しくマシヨさんに接してくれました。彼女たちの学ぶ姿勢や礼儀正しさにふれ、朝鮮族や中国人も優れていると、考えが変わっていきました。

一九四八年ごろ、朝鮮族の患者が入ってきて、足を切り落とす手術をしました。だんだん回復して、マシヨさんもうれしかったのです。ところがある日、彼が自殺したと聞きました。彼は故郷へ帰れるだろうと思っていたので、ショックでした。彼は自分の体を悲観したのかも知れません。そのころ、カナダ人医師が作った病院では義足も作られていたので、知っていれば彼も希望がもてただろうと思うと、看護は難しい、病気の手当だけではないと、残念でした。一九四八年ごろになると、アメリカ軍からペニシリンなどのいい薬が入るようになり、患者さんが治ると、日本人、中国人、朝鮮の人の区別なく、看護の喜びを感じるようになりました。

ある日、病室に呼びつけられてみると、中国人患者に「戦争に負けてまで、まだ俺たちを馬鹿にするのか」といきなりベルトで殴られました。そのときマシヨさんは激しい怒りにとらわれました。それまでの教育でマシヨさんは、日本人は優秀だ、中国人や朝鮮の人より優れているとすり込まれていたもので、「看護してやっている上に、なぜ罵倒され、たたかれなければならないのか」と自分の部屋で半日泣き明かしました。しみついた差別意識は深かったのです。

中国人の医務課長は「日本人も来たくてここにいるのではない。上からの命令で来たんだ。われわれと同じ労働者なのだ」と殴った人に話したそうです。それを伝え聞いてマシヨさんは、「そういう考えもあるのだな」と思いました。

重傷の病室を受け持っていたとき、食事休憩中にストーブから火が出て動けない患者の布団がくすぶり、患者が布団から落ちる事故が起きました。命に別状はなかったのですが、マシヨさんは日本軍のもとならば牢屋行きだと覚悟しました。自分で考えても、油断による落ち度があり、そのために起こった事故でした。しかし中国人医務課長は、今後しっかり任務を果たすようにと注意するだけで、それ以上マシヨさんの責任を問うことはありませんでした。マシヨさんが仕事熱心で、「冷や飯」とあだ名されるほどお昼が遅れるようすを知っていました。またこのころ日本人看護婦たちが帰りがたって、浮き足立っていたので、医務課長は事件を個人の問題とせず、全体の引き締めを図りました。人を許す態度を中国人に見て、マシヨさんの看護は本気になっていきました。

一九五八年三十三歳で日本に帰国するときには、マシヨさんの中国人に対する印象はすっかり変わっていました。国のためにと思っていた少女は、人の命を支えて平和のために看護しようと思うようになっていました。そのころの中国人同僚とはいまでも交流が続いているそうです。

マシヨさんは言います。差別意識は、上の言うことをそのまま信じた個人にも責任がある、自分にはアジアに平和を作り出す責任があると感ずる、と。

(\*当時看護師は女性の仕事で、看護婦と呼ばれていました。)

高比良マシヨさんは、命の看護に自分の道を見出したが、その道は戦争に翻弄され、帰国後必ずしも好意的に日本で受け入れられなかった。中国での仕事は、日本国内の年金に加算されず、中国で思想教育を受けた人として扱われた。個人が国境を越えた命の場に使命を見出し、国境線内の枠の意識で人を判断する場では、うまく受け入れられなかったようだ。そのことは、子どもに語る資料には入れていない。

高比良マシヨさんの語りに、以下の4点を認める。

1. 人間にとっての看護の仕事の普遍ゆえに、またおそらく高比良マシヨさんの卓越した技量ゆえに、ソ連軍下で、中国軍下で、仕事をし、教えたことが、いわばグローバルがローカルに食い込んだ事象の体験が、個人をグローバルな普遍の意識へと教育したと読める。差別するつもりではなかったとしても、ローカルの凝り固まりである差別意識が、それぞれのローカルにもまれて命の普遍へと自分の意識を確立する、すなわち通底する普遍の場に立つことによってとけていったのだろう。

2. 高比良マシヨさんの自分意識を支えたのは、最終的に人類の立場に立つ立場だったろう。日本から出たときはローカルの差別意識に覆われていたという。しかし、さまざまなローカルの場に必要とされた通底する普遍の自覚体験が、差別意識から抜け出る過程を導いたのだろう。人類にとってという意識において仕事をする重要性を示している。それは授

業「木を植える」で、自分が「いのち」だとの認識から職業選択していく子どもの姿と重なる。

3. 差別意識のローカルから抜けて、人類という立場に立つために、被害者意識ナショナリズムを抜け出す努力をしたい、互いの命を守り、高比良マシヨさんの歩いた体験を活かすために。人新世の今、命を守るとは、自然と環境を守ることであり、環境を守ることが自分の命を守るとの、新たなつながりを意識して。
4. 看護師という命を助ける普遍の仕事も、独自のつながりの場をもたなければ、いずれかの軍による分断支配によって、有用性ゆえに利用された。赤十字が国境線を越えた人類のつながりを持ち得ていれば、高比良マシヨさんは軍から軍へと危うさを渡らずにすんだだろう。人類を救う意識は、それを支えるネットワークを必要とする。しかも人新世における、すべてのアクターを視野に入れたつながりのあり方を模索する必要がある。

## 5. おわりに

テトラレンマは、印度文化、中国文化、日本文化のそれぞれに分けると覆い隠され、聖と俗に二分すると見えにくい、あらゆる場合を尽くして通底する論理である。だから、文化に通底して行為の論理として生き続けたのだろう。地球規模において考え、つながる行為基盤を見出し、テトラレンマの思考に拠るとき、ネットワークの



アクターとして、人間も地球表面にあるすべてとともに生存が可能である。つながる命、アクターのつながりにおいて、われわれは存在可能である。世代を超えた命の平和のためには、生命環境や世代を超えるつながりが求められる。テトラレンマは、つながりへと成長する論理として用意されている。成長する意識は、つながりへと向かう、二元思考の否定に始まる。通底する普遍の地平において、人間だけでなく生命環境を構成する菌根菌を含む動植物、環境をアクターとする臨床の構えが、平和に向かう行為と教育を可能にし、人類生存の道である。

本論は、与えられた題を否定して地球規模に飛躍し、戦後の枠づけられた平和意識の浅さを指摘し、命が大切というあたりまえに集約して、子どもがローカルからローカルへの旅において飛躍して、地球課題に答えるグローバルな意識へと自己を成長させてローカルの意味の変容を伴う肯定へと至った教育臨床の分析を通じ、長い旅によって、以下の点で新しい方向を見出したと考える。

1. (生命尊重) 生命尊重に集約して平和を地球の地平で考え、世代をつなぐ方向で語った。それは、平和学や道徳教育といった、教科に区切る思考枠を越えて、自己肯定感に支えられた子どもの育成を目指して具体となり、可能となった。
2. (アクター) 若い世代を自分で平和に向かうアクターとして育てる、過去の体験を引き継がせる対象として見ない構えによって、地球規模の平和に向かうアクターのネットワークを育成する方向は、新しい。地球規模の平和とそのアクター形成を目指して、教育は、人新世における課題に若い世代が自分で対応しながら平和をつくり出す場づくりになる。
3. (臨床) 臨床論として展開する構えによって、すなわち目的論からの演繹ではなくまたメタ理論へと無限遡及する論理構成を避けて、意識の変容に即してつながりを事象に即して詳しく調べて平和に向かつて行為する意識の様相をつないでいく平和論は、新しい。ローカルの具体がつながりによってグローバルに平和を構成する。
4. (テトラレンマ) テトラレンマを、成長による飛躍を組み込んだ行為の論理とする方向は、テトラレンマ本来の形である。通底する普遍の場は、もともと人間に、そして子どもに存する。思考の論理として

通底する普遍の場に至る体験を教育として構想するテトラレンマが、教育臨床の論理である。

文化と世代を超える論理による提案が、「核抑止論からの脱却」の問いに、脱却した地点を示して、応える。敵基地攻撃や相手の論を打ち負かす二元論を離れて、考え、育て、平和を構築することが、人類の体幹を強くする。体験し行為する意識の展開をテトラレンマの論理によって理解しながら、平和をつくるつながりを育てる必要がある。

本論は、通底する普遍の語を使ったが、この語はしっくりこない。それは、二元論の否定を語りながら、普遍の相に属する語を2回重ねるひねりと、内実は個別の「いのち」であるから。子どもは、二つの地域を越えて通底する「いのち」を見出したが、それは共通と異質の二元論ではなく、地球を覆う普遍の相に個別の命を位置づけた。両否によって普遍に至りながら、なお個別を内容とする。その、テトラレンマによって明らかにされる構造をしっくりこない無理によって一語で表そうとするからである。個別が普遍の相にあるとは、一即多である。命は多として普遍の相にあり、個別として現前する。

本論が主張したのは、従来の平和の思考が二分法と国民国家の枠にとらわれて空しさを含む、これを越えるためには、とらわれない思考のテトラレンマによる理解が妥当であり、そうして人類の未来が見える点である。現在の意識状況に介入できる論理を求めたとき、テトラレンマがあらゆる場合を尽くして通底する論理であり、そのしなやかさによって状況の枠を外し、未来を見ることができる。

しかし本論が人間のすべての体験と行為のテトラレンマによる理解を根拠づけるわけではない、長い旅によって従来なかった地点に話を運んでも、体系的ではない理由である。また、テトラレンマを聖なる世界から論理解放的に、つまり宗教世界から解き思考に反省的に位置づけること、翻ってその反省がテトラレンマに拠るかは今後の課題である。位置づけは臨床と称した構えによるが、本論はテトラレンマによる可能性<sup>23)</sup>を示したところで終わる。

## 注

- 1) グローバルサウスが中国を含むか否か、本論では、世界の GDP 第 2 位の大国だとして、中国を除外する。日本経済新聞 2023 年 3 月 23 日秋田裕之が「中印が争う『サウス』の盟主」の特集コメントを載せている。
- 2) IMF (国際通貨基金) の資料による 2022 年の名目 GDP 世界ランキング, <https://eleminist.com/article/2110>, 2023 年 3 月 23 日閲覧, に基づいて計算した。
- 3) ロビー・パレットは植民地化と言う: 中国にとって真の機会、ロシアのプーチン大統領のウクライナにおける悲惨な誤算を利用して、ロシアを経済的に植民地化することです。(朝日新聞, 2023 年 4 月 8 日, 交論)
- 4) ロビー・パレットは中東研究者として「イランと湾岸アラブ諸国が本当に良い関係になることは有り得ません」、アメリカの存在感は後退しておらず「好むと好まざるとに関わらず、湾岸地域の安全を保証しているのは米国なのです」(朝日新聞, 2023 年 4 月 8 日, 交論) と言い、アメリカとロシア・中国の二元論の枠での動きに止まると説明する。
- 5) 共同通信 <https://nordot.app/1008909100654247936>, 2023 年 3 月 24 日閲覧
- 6) [http://www.peoplechina.com.cn/zhongrijiaoliu/2008-03/31/content\\_107971\\_3.htm](http://www.peoplechina.com.cn/zhongrijiaoliu/2008-03/31/content_107971_3.htm), 2023 年 3 月 29 日閲覧
- 7) 王広涛, 2015, 中国の対日戦争責任区別論と賠償政策, 法政論集 261 号, pp.265-300  
file:///C:/Users/kamizono/Downloads/nujlp\_261\_9.pdf
- 8) ラトゥールは次のようにいう: 「近代」という言葉を使った途端に、わたしたちは例外なく戦いの只中に放り込まれる。そこには勝者と敗者、古代人と近代人がいる。そうしてラトゥールは近代概念再検討を始める(ラトゥール, 2020, p.26)。西欧は勝者、東洋は敗者、ギリシャ・ローマ人と西欧近代人の他に、われわれはこれに西洋近代人と東洋古代(インド・中国)人と付け加えていいかもしれない。
- 9) ラトゥールは、西欧世界を定義し、その他の世界から隔てる二組の対極(自然-社会、ローカール-グローバル)に焦点を当て、この網から離れようとする(ラトゥール, 2020, p.206)。この二組は、後述の授業が超えようとした二元論である。この 2 つの二元論をどう超えるかは、後に国際道徳授業「木を植える」の授業における子どもの意識変容として示される。
- 10) ここでは、若採りのらっきょうをエシヤレットと称するすきま商品は考えに入れない。
- 11) なお、華嚴五教章は時間についても相即相入の構造が成り立つところに進む: 時もまた相即相入無礙たること(鎌田茂雄, 2003, p.296)。また「それ(一即多・多即一-引用者註)を空間的と時間的に分けて考えていく」(鎌田茂雄, 2002, p.86) と言う。
- 12) 映画「万引き家族」をみて吹き飛ばす平和意識については、上菌恒太郎, 2022, に書いた。
- 13) 自己肯定感の定義は、上菌恒太郎, 2015, を参照。中国の自己肯定感育成も自己有用感も、他者からの評価を語っている。自己の有用性は他者の評価に左右されるが、自己肯定感是他者評価に揺らがない。自己肯定感は自分についての自己の肯定であり、伸びることができるの思いを含む、自らの内省において形成される。
- 14) cf. 上菌恒太郎, 蒲池文恵, 2017, p.109。COVID-19 ゆえに、中国に出かけられず、2022 年秋時点のすべての教科書に「地球村」があるかは確認できていない。
- 15) 日本における生命尊重項目については、上菌恒太郎, 2018, に詳しい。
- 16) 直接愛媛県の小学校 5 年生について論じていないが、「ミサゴのいる山」による自己肯定感を育てる授業については、上菌恒太郎, 森永謙二, 2018, を参照。
- 17) 資料「木を植える」は上菌恒太郎と森永謙二が、東京、久留米で取材した自作資料である。
- 18) 沙漠は、砂の下に水分を含んだ層があり、以前は緑があった土地である。植樹場所は沙漠であるが、資料は子どもが知っている砂漠の字で統一した。
- 19) 普遍の語は多様に使われ、使いにくい。本論で使った普遍の他に、例えば高谷好一, 1997, は普遍を経済発展に当てはめて批判し、普遍論理と個別の論理の二分法を戒め、環境問題を持ち出すが、自己の言う多文明主義は、普遍に対して多元で終わる二元論に収まる。高谷好一は、多の分け方を俯瞰して二元論で議論し、文明の生成を力動的に捉えようとするが、俯瞰された下にごめく個別のアクターには話が及ばず、アクターの普遍の場への躍り上がりは語らない。
- 20) 子どもが集団で思考を飛躍させる点を、L.S. ヴィゴ

ツキーの最近接発達領域（ZPD）に当てはめることができる。しかし本論は今までの考えで説明を終わる以上に、新たな論理展開として考えたい。

- 21) 資料「人間らしい生き方」は上菌恒太郎と畑島英史が藤井昇さんの対馬のご自宅を伺い、海上自衛隊佐世保史料館などで事実関係を確認して、上菌恒太郎が作成した。
- 22) 資料「とけていった差別意識」は、蒲池文恵ならびに上菌恒太郎が長崎市内アマランスで高比良マシヨさんに話を伺って、上菌恒太郎が作成した。
- 23) 西垣通は「心から尊敬するフランシスコ・ヴァレラ」（西垣通 2005, p.240）に拠って「ヴァレラは大乗仏教の『一切空』とか『縁起』の思想を引用し…すべてが縁起によって、つまり関係性によって生起する。実体というものはない。ところが、それが慈悲の概念と結びつく」、するとテトラレンマと言わないが「要するに、情報学、あるいは生命流、といったところからものを考えていくことによって…近代の世界観を塗り替えていく可能性がある」（西垣通 2005, p.242）と示唆する。

## 引用文献

- 1 林志弦, 長谷川貴彦(訳), 2022a, ネオ・ポピュリズムの時代に大衆独裁を呼び起こす—ファシズム, ポピュリズム, デモクラシーの収斂について—, 『思想』no.1174, pp.12-30
- 2 林志弦, 澤田克己(訳), 2022b, 犠牲者意識ナショナリズム 国境を越える「記憶」の戦争, 東洋経済新報社
- 3 鎌田茂雄, 2003, 華厳五教章, 大蔵出版株式会社
- 4 鎌田茂雄, 2002, 華厳の思想, 講談社学術文庫
- 5 上菌恒太郎, 2022, 映画「万引き家族」の観客にとっての意味, 長崎総合科学大学紀要61巻2号, pp.5-76
- 6 上菌恒太郎, 森永謙二, 2022, テトラ・レンマの思考による生命尊重の授業分析—国際道徳授業「木を植える」—, 長崎総合科学大学紀要62巻1号, pp.1-31
- 7 上菌恒太郎, 森永謙二, 2018, 自己肯定感を育てる道徳授業の構成—「ミサゴのいる山」の物語を例に, 長崎総合科学大学紀要57巻2号, pp.61-91
- 8 上菌恒太郎, 2018, 生命尊重の総合的な学習を広げる映画活用の提案—中学生が映画「うまれる」を観て思ったこと—, 長崎総合科学大学紀要58巻2号, pp.67-106
- 9 上菌恒太郎, 蒲池文恵, 2017, 中華人民共和国の道徳教科書にみる自己肯定感の育て方と愛国心への集約, 長崎総合科学大学紀要56巻2号, pp.94-148
- 10 上菌恒太郎, 2017, 連想法による道徳授業評価教育臨床の技法, 教育出版
- 11 上菌恒太郎, 2015, 子どもを支える道徳授業の必要, 教育哲学研究112号, pp.130-150
- 12 上菌恒太郎, 2014, 平和の定義—平和責任:被害, 加害責任, そして記憶の文化—, 長崎大学教育学部紀要教育科学78, pp.19-27
- 13 高谷好一, 1997, 多文明世界の構図—超近代の基本論理を考える—, 中公新書
- 14 竹村牧男, 2020, 『華厳五教章』を読む, 春秋社
- 15 ダワー, ジョン, 三浦陽一, 高杉忠明, 田代泰子(訳), 2001, 敗北を抱きしめて(下), 岩波書店
- 16 トゥールミン, スティーヴン, 藤村龍雄(訳), 2009, 理性への回帰, 法政大学出版局
- 17 西垣通, 2005, 情報学的展開—IT社会のゆくえ—, 春秋社
- 18 西垣通, 1999, こころの情報学, 筑摩書房
- 19 文部省, 1947, あたらしい憲法のはなし, 実業教科書株式会社
- 20 箭内匡, 2022, 多種(マルチピース)民族誌から「地球の論理」へ, 『思想』No.1182, マルチピース人類学, 2022年10月, pp.82-102
- 21 山内得立, 1974, ロゴスとレンマ, 岩波書店
- 22 ラトゥール B., 川村久美子(訳), 2020, 虚構の「近代」—科学人類学は警告する—, 新評論
- 23 ラトゥール B., 伊藤嘉高(訳), 2019, 社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門—, 法政大学出版局
- 24 王広涛, 2015, 中国の対日戦争責任区別論と賠償政策, 法政論集 261 号, pp.265-300

file:///C:/Users/kamizono/Downloads/nujlp\_261\_9.pdf